SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

モンゴルにおける王朝交替観に関する一資料：「遠太子と真太子の物語」を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000467

モンゴルにおける王朝交替観に関する一資料
―「遠太子と真太子の物語」を中心に―

楊　　海　　英

目　次

１．本研究の基本資料
２．王朝交替観に関連する従来の研究
３．民間のテキスト
　３．１　従来の収集と研究
　３．２　資料提供者
　３．３　テキスト
４．歴史と現在をつなぐテキスト
　４．１　伝説を語るとき－8月15日の現代的な意味
　４．２　「ミニ年代記」的な作品の意義

モンゴルが中原から撤退し、漢土に明朝が成立する。長城以南の王朝交替をモンゴル側はどのように理解し、如何に伝えてきたのであろうか。「遠太子と真太子の物語」は、そのような認識を示す重要な資料である。

１．本研究の基本資料

元朝に代わって明朝が中原に成立するということは、当事者のモンゴルにとってもきわめて重要な出来事である。イデオロギーの面では、大元王朝の「伝国の玉璽」が最後の大ハーンであるリクダン・ハーンから後金国の太宗に渡るまで、即ち1636年に清朝の成立まで元朝は存続しつづけた、とモンゴルの支配者層や知識人たちは理解していた。「中興の祖」とされるダヤン・ハーンのダヤンも「大元の汗（ダーユアン ハーン）」を意味するなど、元朝は決して忘却された存在ではなかったのである。「伝国の玉璽」を後金国に渡した際、内モンゴルの諸王公は太宗に「聖なるハーン」(boγda qaγan) の称号を贈り、太宗がモンゴル高原の盟主でもあることを認めた。その後、清朝はモンゴル帝国の後継者としてモンゴル高原と

中原の両方で正統な支配者になっていく[1]。

元が長城以北を主な拠点とするようになり、中原が明朝に変わった歴史を、モンゴル側の諸資料は詳しく伝えている。ここでいう諸資料とはさまざまな年代記や民間伝承の両方を指す。もっとも、モンゴルの年代記は口頭伝承的な要素を大いに帯びており、民間伝承は年代記作者の格好の材料のひとつでもあったのである。

数多い年代記のなかで、本論文ではまず17世紀に書かれたとされるロブサンダンジンの『黄金史（アルタン・トブチ）』と、1662年に完成されたサガン・セチェンの『蒙古源流（エルデニン・トブチ）』の記述をとりあげたい。モンゴルの諸年代記のなかで、記録している内容がもっとも豊富で、かつ影響力が大きいからである。元朝のトゴン・テムール・ハーンと明朝の永楽帝との伝説的な関係についても、2つの年代記の描写がもっとも詳しい。

まず『黄金史』の記述（Lubsangdanjin 1990：138b-139b）を見てみよう。

tere törü abtaqui-tur Uγaγatu qaγan-i Qonggirad qatun γurban saratai köl kündü aγsan aču: tere qatun butung dotura oruju γočurba: tere butung-i kitad γang kekü: Mongγol butung kekü: tere qatun-i kitad-un Jüü Qungγu-a qaγan abču qan orun-tur saγuba: tere qatun sedkerün: doluγan sara baraču üjigdebesü: dayisun-u köbegün kejü tebčikü: arban sara bolču üjigdebesü öber-ün köbegün kejü maγu ülü kikü kejü: tngri ečige minu örüsiyečü γurban sara nemečü arban sara bolγaju örüsiyen suyurq-a: kejü jalbiran jabubai: tngri örüsiyejü arban γurban sara bolču noγun kögüken üjigdebe: Jüü Qungγuu qaγan-i kitad qatun-ača nigen noγun kegüken törübe: Qungγuu qaγan-u jegüdün-tür qoyar luu kereldükü üjebesü: baraγun luu-yi jegün luu dayilun bayiqui üjin jegüdülebe: ene jegüdün minu sayin buyu: maγu buyu kejü irüčin-tü üjügülbe: tere qoyar luu bosu: qoyar kegüken činu büi: baraγun luu kegči kitad qatun-u kegüken büi: jegün luu kegči Mongγol qatun-u köbegün büi: čin-u qan orun-tu saγuqu jayaγatu buyu: irüčin-i tere ügen-tür Qungγuu qaγan ilaγal ügei mön üre bolbači eke inü dayisun-u qatun bölüge: egün-eče törügsen köbegün minu qan oru saγubasu maγu bayinam kejü qaγan-u ordu-ača γarγaju: kerem-ün γadana köke qota bariču tende saγulγaba: tegün-ü qoyina Qungγuu qaγan yeke oru

1　清朝をモンゴル帝国の後継者とみなす見解は、諸モンゴル史学者の学説に負うところが大きい。具体的には岡田（1993:213-215）、杉山（1992:309-312）、森川（1997:325-348）等を参照した。

saγuču γučin nigen on bolču ügei bolba: ❖

tegün-ü köbegün Jaγuy-a qaγan: qan orun-tur saγuču dörben on boluγsan-u qoyina Qonggirad qatun-u köbegün Junglu qaγan öberün čöken nöküd: ölgeyin jirγuγan mingγan Mongγol ulus: usun-u γurban tömen Jörčid ulus: qara kerem-ün ulus-i abun čirig jasaču kürüged: kitad-un Qungγuu qaγan-u köbegün: Jaγuy-a qaγan-i bariju küjügün-tür inü mönggün tamaγ-a daruju üldejü orkiba: ❖ *mön uqaγatu qaγan-u köbegün: Yunglu qaγan ejelen saγuba: kitad ulus yosutu qaγan-u man-u üre saγuba kejü: Yunglu dayiming nere ürgübe:* ……

訳：

そのように国が滅ぼうとしていたとき、ウハート・(トゴン・テムール・) ハーンのホンギラート部出身の妃が妊娠3ヶ月の身だった。その妃は甕のなかに隠れていて逃げ遅れた。甕のことを漢語では缸(がん)といい、モンゴル語ではブトンと呼ぶ。漢人の朱洪武はその妃を娶って帝位についた。

妃は分かっていた。「もしあと7ヶ月で生まれたら、敵の子だとされて捨てられてしまう。あと10ヶ月たって生まれたら、自分の子だとして害を加えることもないだろう」と思い、「父なる天よ、3ヶ月のばして10ヶ月間下さい」と祈り、悩んだ。天はそれを許し、計13ヶ月[2]間たってからひとりの男の子が誕生した。朱洪武の漢人妃からも男の子がひとり生まれた。

朱洪武は2匹の龍が喧嘩しているという夢をみた。夢のなかでは、西の龍を東の龍が攻撃していた。「これは良い夢か、それとも悪い夢か」と占い師に聞いてみた。「その2匹の龍というのは、2人の皇子のことです。西の龍は漢人妃から生まれた皇子です。東の龍とはモンゴルの妃が生んだ皇子で、陛下の皇位を受けつぐ運勢をもっています」と占い師は答えた。

占い師のことばを聞いた朱洪武は、「同じように2人ともわしの息子であるとはいえ、ひとりの母親はもともと敵の妃だ。彼女から生まれた子が皇位につけば、きっとよくない」と思った。皇城から追い出して、城外に「青い城(ギョク・ゴト)[3]」を創って住まわせた。

その後、朱洪武は31年間在位して亡くなった。その息子の朱爺(ジューヤ)が帝位についた。4年後、ホンギラート部出身の妃から生まれた永楽帝は、自分の数少ない追随者や山陽の6千人のモンゴル兵(ウルス)、水辺の3万人の女真兵(ジュルチト・ウルス)、それにハラ・ケレムの兵を招集して攻めた。漢人の朱洪武の息子朱爺帝を捕まえて、その頸に銀の烙印を焼きつけて生かしておいた。(明朝にも) ウハート・(トゴン・テムール・) ハーンの息子である永楽帝が君臨した。漢人の国の正統な帝位もわが

2　13はモンゴルの聖なる数字である。ここでは聖数を用いることにより、暗に非凡な人物であることを示唆しているのではなかろうか。

3　小林は『蒙古黄金史』(*Qad-un ündüsün-ü quriyangγui altan tobči*) の注釈のなかで、『武備志・巻二二七・四 夷五・北虜考』には獨石口をクケ・ホトとしているが、『蒙古黄金史』所載のクケ・ホトとの関係は不詳である、としている (小林　1941:91)。

（モンゴルの）子孫がついたことで、「永楽大明」という名を与えた。……

以上のように、『黄金史』はトゴン・テムール・ハーンの遺児としての永楽帝の即位経緯を描いている。つづいて『蒙古源流』の記述（Sanang Sečen 1962: 181-182）を見てみよう。

tere metü urida Mongγol-un Toγan Temür Uqaγatu Qaγan-ača: uu bičin jil-e: kitad-un Jüge noyan: Dayidu qota-yi abču: qorin tabun-iyan uu bičin jil-e: qan oru-a saγun: dayiming Juu Qungγu qaγan kemen aldarsibai (aldarsijuqui) ❖: ❖

tende Uqaγatu Qaγan-u γudaγar gergi anu: Qonggirad-un Toγtaγ-a Tayiši-yin ökin Gereltei kemekü qatun anu. doluγan saratai: köl kündü aldalduču qočuruγsan-i: Qungγu qaγan beyedegen abun: γurban sara boluγad: mön tere mečin jil-e niγun üjigdegsen-tür: eyin kemen jarliγ bolču: urida tnggerlig ejin minu namai ülemji qayirlaγsan bülüge: edüge ene keüken tegün ükei ču bol minukei ču bol: sayin-u ači-yi sayin-iyar qariγulun: bi ür-e yügen kisügei: ta ken-ber busu buu bulaγadun kemeged: mön ür-e yügen kibei ❖ nönüge kitad qatun-u köbegün anu: Juu Daγay-a kemekü lüge qoyar köbegün ajuγu: tendeče Juu Qungγu qaγan ečige inü: γučin nigen jil-e: ulus-un törü-yi bariγad: tabin tabun-iyan uu bars jil-e qalibai❖

tegün-ü qoyina kitad-un yeke baγ-a tüsimed keleldüjü: Mongγol qatun-u köbegün: aq-a bügesü-ber: öber-e kümün-ü ür-e bülügei❖ tere-ber ösügsen-ü qoyina: kitad ulus-i: öšeleküy-e medege ügei buyu❖ kitad qatun-u köbegün: degüü bügesü-ber: öber-ün ür-e büküi-yin tula: egün-i qan ergüy-e kemeldün: Juu Daγay-a ging noqai jil tai: qorin yisün-e inü: uu bars jil-e qan orun saγulγabai❖: ❖ dörben sara: arban naiman edüd boluγad: mön tere uu bars jil-e qalijuqui❖

tegün ükei köbegün ügei-yin tula: tedüi Mongγol qatun-u köbegün: Yunglu ejen kemekü-i γučin qoyar-iyar gi taulai jil-e: qan orun saγun: Garma u-a-yin tegüčilen iregsen rolbi dorji: Saskiy-a-yin yeke kölgen-ü: tegčen dorji: Ksar-a-yin: yeke asarangγui: bsamčin čorji: γurbaγula-yi darui deger-e jalaju: sasin törü qoyar-i: tegsi de bayiγuluγad: narbai yeke ulus-i: esen tayibing bolγan: qorin qoyar jil-e: qan orun-i bariγad: tabin-iyan ging quluγan-a jil-e

qalibai❖

訳：

そのように、以前モンゴルのトゴン・テムール・ウハート・ハーンから、戊申年に漢人の朱哥官人（ジューゲ・ノヤン）が大都城を奪いとった。同じ戊申年に25歳で皇帝になり、「大明朱洪武皇帝」として知られるようになった。

ウハート・（トゴン・テムール・）ハーンの第3夫人は、ホンギラート部トクター太師の娘で、名をゲレルタイという。彼女は妊娠7ヶ月で、（ハーンと離散して）逃げ遅れた。洪武帝は彼女を娶り、3ヶ月後、同じ戊申年にこっそり出産した。そこで、朱洪武は次のような命令を下した。「以前に天命を受けた（元の）皇帝はわしを可愛がった。今生まれた子どもが彼のであろうと、わしのであろうと、善には善を以って報いなければならない[4]。わしの息子にしよう。お前たちも蔑視してはいけない」といった。そのとおりに自分の息子とした。もうひとりの漢人妃から生まれた朱大爺とあわせて、2人の息子をもつようになったのである。

父皇朱洪武は31年間執政し、戊寅年に55歳で崩御した。漢人の大小さまざまな臣下たちが議論した。「モンゴル人妃の息子は長男ではあるが、余所の人間の子孫だ。彼が大きくなったら、漢人の国から仇をとるかもしれない。漢人の妃から生まれた息子は次男ではあるが、（皇帝）自身の子だから、彼を帝位につけよう」といいあった。

朱大爺は庚戌年の生まれで、29歳のとき、同じく戊寅年に即位した。4ヶ月18日間在位したあと、同じ戊寅年に崩御した。

朱大爺には後裔がないため、モンゴル人妃が生んだ永楽主君が己卯年に32歳で即位した。ただちにガリマ・ウーワのロルビ・ドルジ、サスキャの大乗たるテチェン・ドルジ、サラの慈悲深きサムチャン・チョルジの3人を招請し、政教二道を建てなおし、太平の世を創りあげた。永楽帝は22年間在位し、庚子年に50歳で崩御した。

以上、『蒙古源流』の方は、トゴン・テムール・ハーンの妃について、『黄金史』よりもやや詳しい情報を提供している。「モンゴル人」の永楽帝の即位後の功績である仏教弘揚についても触れている。

年代記とは別に、民間にも永楽帝をトゴン・テムール・ハーンの子とする口頭伝承がある。口頭伝承の方が当然、年代記の記述よりも生き生きとした物語からなっている。トゴン・テムールと永楽帝を語る伝承は、モンゴル社会で広く知られており、口頭だけでなく、写本の形でも流伝されている。口頭伝承は年代記の記述とともに、王朝交替観を示す重要な資料である。本論文では私自

4　詳しくは後述するが、周氏は、『蒙古源流』のこの記述を独創的な創作にすぎないとしている。恩を仇で返すという物語を設定したモンゴル側の心理は、トゴン・テムール・ハーンを宋の末帝の子とする宋の遺民の設定と本質的には同じである、と指摘している（周　1987:15）。

身が中国内モンゴル自治区の民間から収集した上記口頭伝承の写本を基本的な資料に、年代記の記述ともあわせて、モンゴルにおける王朝交替観の一側面について検討を試みる。

2．王朝交替観に関連する従来の研究

元朝と明朝、かりに王朝交替という視点で両者の関係について論じるならば、「継承国家論」はひとつの有効なアプローチであろう。それは、モンゴルが世界帝国を築きあげ、歴史のかなたへ消え去ったあとに、明朝を含めて各地に誕生した諸王朝をモンゴル帝国の遺産とする見解と、異姓革命によって前王朝の失政を新政権の天命拝受に結びつける見方の両方に共通した方法である。

岡田英弘氏は、『世界史の誕生』(1992) という著作の中で、世界各地の歴史的な作品をとりあげて分析している。その一環として、本論文の冒頭で紹介したモンゴルの年代記『蒙古源流』については、およそ以下のような見方を示している。

『蒙古源流』は世界史である、と岡田氏はまず位置づけている。それは『蒙古源流』がただ単にモンゴルの王統のみについて書いているのではなく、宇宙の起源から始まる人類の誕生史のなかでのモンゴルの王統史としているからである。チンギス・ハーンによる世界征服を語り、世界帝国の一翼を成す元朝の歴代ハーンの治世についても述べる。いわばチンギス・ハーン家の高貴な血統を中心の軸とする世界史である（岡田　1993：250-253)。

以上のような立場をとる岡田氏は、『蒙古源流』の記述形式については、次のように分析している（岡田　1993：252-253)。

> そこで面白いのは、明の永楽帝の出身についての物語である。トゴン・テムール・ハーンの中国脱出の時に、そのモンゴル人の皇后が取り残されたが、すでに妊娠していた。明の朱洪武がこれを娶って、生まれたのが永楽帝であった。朱洪武の別の中国人の皇后から生まれたのが建文帝であった。永楽帝は父に疎んじられて、北方辺境の北京に追いやられたが、朱洪武の死後、モンゴル人たちの後援で挙兵して南京の建文帝を滅ぼし、皇帝となって北京に都を定めた。これは、明朝の歴代の皇帝も、チンギス・ハーンの血を引いているという趣旨の物語である。永楽帝がトゴン・テムール・ハーンの遺児だというのは、もちろん事実ではないが、この物語は、明朝の中国がモンゴル帝国の継承国家であることを表現したものである。

このように岡田氏は継承国家の視点から『蒙古源流』の叙述形式に注目しているが、同氏は明朝だけでなく、清朝や中華人民共和国も実際はモンゴルの継承国家である、と一貫して主張している（岡田　1993:210-215;2002:17-217）。

もうひとり、杉山正明氏は何回かにわたってさらに詳しく論じている。杉山正明氏の数々の著作のなかに、モンゴル帝国の海上経営について書かれた『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道』がある（杉山　1995）。元代の海上経営について詳述した後、継承国家として明の永楽皇帝の偉業に関してもその本質を分析している。

杉山氏はいう。明朝の第3代皇帝で、父の洪武帝とはちがった意味で明の建設者とされる永楽帝は、内陸ではモンゴル高原に何度も親征し、海上では鄭和による大艦隊を数回にわたってインド洋に派遣した。永楽帝は大元王朝の帝都を自らの都に選び、その名を北京に変えるなど、国家経営の手法は明らかに大元王朝の再建をねらっていた（杉山　1995:252-253）。「（永楽帝は）じつは誰よりもクビライを尊敬し、その模倣につとめた。ほとんど、かれは〈クビライ教〉の信者であった。永楽帝は、中国を失うことになった順帝トゴン・テムルの子であるという〈俗信〉が、漢族にもモンゴル族にもひろまったのもうなずける。トゴン・テムルの子を宿した女性を、洪武帝がその後宮に入れたというのである」、と杉山氏は民間伝承にも注意をはらいながら永楽帝評価を下している（杉山　1995：253）。

モンゴル帝国が滅び、「ポスト・モンゴル時代への道」への変遷についても、杉山氏らは述べている（杉山／北川　1997）。杉山氏らは、大元王朝の解体を自滅と認識している。「順帝悲歌」[5]を吟じて大都を捨てて北に退却したトゴン・テムール・ハーンの悔恨と自責はモンゴル人によって語りつがれたが、トゴン・テムール・ハーンは決して単純な悲劇の皇帝ではない、と杉山氏らは主張している（杉山／北川　1997:245-247）。トゴン・テムール・ハーンと朱元璋（すなわち朱洪武）を比較した場合、その実像ははっきりしていた。一介のこそどろから、白蓮教の武装狂信集団に身を投じて成り上がりのきっかけを得た朱元璋は、もし彼らを鎮圧するためのモンゴル軍の自滅がなければ、歴史に名を残すこともなかったであろう。江南に乱立していた群雄のうち、最有力な陳友諒の

5　いわゆる「順帝悲歌」については、従来からモンゴルの知識人層によって、極めて象徴的でかつ情緒的に語られてきた。歴史学だけでなく、文学の立場からの論考も数多く出ている。日本では Okada（1967:55-78）による研究がある。

敗退も、まったく偶然であった（杉山／北川　1997：248)。

一部で「洪武大帝」と呼ばれたりして過大評価されている朱元璋であるが、実際はどうであったろうか。杉山氏らの朱元璋論（杉山／北川　1997:249-251）をみてみよう。

> 現実の朱元璋は、悪のかたまりといっていい根深い人物であった。のしあがる過程でも、いくらでも人を裏切り、平気で旧主や朋友を殺した。政権を樹立したのちは、苦労時代の功臣ごと、なんと五度にもわたって、政府官吏を家族ぐるみで、しかもそのつど万単位で大量虐殺した。……（中略）世界史上、朱元璋のような例は、さすがに見当たらない[6]。
>
> かれは、知識人を憎悪していたのだろう。自分の治下から、本気で文化や知識をになう人間を一掃しようとしたのでは、とさえ思えるほどである。……（中略）それは、白蓮教のメシア思想が、かれのなかでまだ生きていて、自分をこそ衆生を救うために下生した弥勒なのだと思っていたかもしれない。そのためには、救われる衆生は、かそけくはかなき存在でなければならず、救うべき自分は、絶対唯一の権能者でなければならなかったのか。ともかく、「大明（だいみん）」という国号からして、白蓮教の匂いは強い。そして、おそらくもはや、かれには人間らしい心はなかったのだろう。
>
> ……（中略）
>
> ひるがえって、明朝史書がしつこく繰り返すトゴン・テムルへの悪罵は、朱元璋とその子孫がしからしめたものである。そうでありながら、一三七〇年にトゴン・テムルが他界したと聞くや、すぐに「順帝」とおくり名したのは、あきれた身勝手ぶりというほかない。
>
> トゴン・テムルは、明に「帝権」をわたしなさいという「天命」に順（したが）ったのだ、だから「順帝」とおくり名するのだ、──つまり明は「元」から「天下」を晴れてゆずられたのだという論法は、下品というか、朱元璋とその政権のたしなみのほどを、ストレートにしのばせてくれて、むしろ吹き出したくなるおかしさがある。……（以下略）

以上のように、王朝交替期における明側の主人公、朱元璋についてのモンゴル史研究家の評価は非常に厳しい。朱元璋の数々の「不名誉」な行為から、彼

6　愛宕と寺田は明の成立を「中華帝国の復活」と位置づけ、朱元璋を「孤独な独裁者」としている。朱元璋時代の「胡・藍の獄」や「文字の獄」についても記述している（愛宕／寺田　1998:257-294)。

は漢人知識人たちからもさほど尊敬されなくなり、代わりにいくつもの偉業をたてた永楽帝への関心が高まったかもしれない。いずれにしても、明朝の国家運営そのものが元朝の継承であることが明白である、との主張である[7]。

明の永楽帝が元のトゴン・テムール・ハーンの息子だとする伝説は、明側あるいは中国側にもあり、古くから漢人知識人たちの関心を引いてきた。なぜそのような伝説が登場し、その裏にどんな思想が潜んでいたかについて、中国内モンゴルの周清澍氏による研究（周　1987）がある。

周氏は「弘吉剌（ホンギラート）氏を明の成祖の生母とする説の天命観」（1987：1-18）と題する論文のなかで、明の成祖永楽帝を元のトゴン・テムール・ハーンの子とする説と、トゴン・テムール・ハーンを宋の末帝趙顕の子とする２つの伝説とを比較し、両者に共通する思想的要素について考察している。

周氏はまず永楽帝をトゴン・テムール・ハーンの子とする漢籍の記述を逐一検証している。もっとも早くこの伝説を記しているのは、1623（天啓三）年の『南京太常寺志』で、永楽帝の生母を碽妃としている記述から伝説が生まれる。その後の諸文献はだいたい『南京太常寺志』の記述を踏襲し、さらには明孝陵奉先殿内の配列を根拠にしている。中央に太祖朱元璋と馬皇后をはじめ、東側には諸妃を並べたのに対し、西側は碽妃ひとりだけの神座がある。碽妃がこれだけ優遇されているのは、永楽帝の生母であるからだ、と諸文献は推測に基づいて伝えている（周　1987:1）。永楽帝の生母については『明太祖実録』や『皇明玉牒』などの「原始資料」では馬皇后とするが、その他の記述は閹人や燕之故老の説と奉先殿の配列に依拠しているという（周　1987：1-4）。周氏は1930年代の歴史研究者たちは論争の結果、共通の認識に達したと見ている。つまり、永楽帝は1360（至元二十）年に生まれたと「原始資料」が記しており、トゴン・テムール・ハーンが大都から北へ撤退した1368年とはかなり離れているので、疑う余地がない、との立場である（周　1987:3-4）。これに対し、日本の明史研究家寺田は次のような見方をしている。成祖永楽帝の誕生については、古くから疑問がもたれている。永楽帝の母親を馬皇后とする『明実録』も燕王朱棣が

7　杉山氏の説に対し、明史研究家の檀上氏は次のように反論している。モンゴル時代の〈近代〉への傾斜を認める立場からすれば、つづく明代を否定的に評価するのも当然であろう。永楽帝を除く明の皇帝たちの〈内向き〉、〈後ろ向き〉ととらえ、洪武帝を「近代的」システムの破壊者とする杉山氏の観点は現代中国の洪武帝に対する見方とも一致する。所謂〈後ろ向き〉にも中国的な特質があるのではないか。洪武帝は権力を背景に社会の隅々に統制を加えようとした。力と強制で儒教的秩序を実現し、維持しようとした。そのためには手段を選ばなかった。洪武帝の確立した専制国家を中国社会の体制的な帰結とみなさなければならないという（檀上　1997:303-316）。

永楽帝になってからの記載であり、当然粉飾が加わっている。ことの真相について、今日になっては調査の材料もないし、永楽帝の母親が誰であろうかも大した問題ではない。嫡出か庶出かにこだわるよりも、疑義がもたれていることに注意しなければならない。つまり、疑義は永楽帝の帝位簒奪など華やかな一生と無関係ではない、という立場である（寺田　1997:35-37）。また、寺田は愛宕との共著のなかで次のように書いている。「もっとも、燕王（すなわちのちの永楽帝一棣）の誕生については、古くから疑問がもたれ、かなり広く、それが信じられていた形跡がある」、という（愛宕／寺田　1998：295）。

周氏によると、トゴン・テムール・ハーンを宋の末帝趙顕の子だと最初に伝えたのが、明初の『庚申外史』だという。その後は『政和県史』や『国榷』にも記載されるようになる。近代にはいると王国維や余嘉錫らによる論考も現れた。ただしこれらは、「地主階級の文人たち」の精神的な自慰行為にすぎない。この種の文人たちは自分たちに向けられた元朝による差別に反抗する勇気も、農民蜂起軍に加わる気力もないため、先代王朝の血脈が元の帝室に流れているという伝説をつくるしかなかったと論破している（周　1987：4-10）。

以上のような基本的な立場を示してから、周氏はトゴン・テムール・ハーンを宋の末帝趙顕の子とする伝説と、永楽帝の生母をホンギラート氏とみる伝説の「社会的な背景」と「思想的な根拠」について分析している。

永楽帝の生母をホンギラートとする説の思想的背景に関する周氏の考察は極めて明瞭である。伝説の背景には宋代に出現した、邵雍らを代表とする先天学的な理論がある、と周氏はいう（周　1987:9)。『周易』や道教思想に基盤を置き、王朝交替を天命[8]と因果報応によって説明しようとする。この種の理論は宋代理学の独特な一派を成す。程朱理学が正統派へと脱皮していくのに対し、邵雍の思想は民間の占卜師や方士らによって伝播し、程朱理学以上の影響力をもっていたという（周 1987：9)。

モンゴル人にはもともとシャマニズムに依拠した天命観があった。その上中原に百年以上も滞在していたため、邵雍流の思想は容易に受け入れられただろう。いざ元朝が滅ぶと、モンゴル人も王朝交替は天命によるものだと自覚すると同時に、朱哥こと朱元璋が如何に元帝の恩寵を裏切ったかを描く。元を裏切っ

8　『明太祖実録』巻二十六呉元年冬十月丙寅の項に朱元璋から斉魯河洛燕薊秦晋の人びとに出した檄には次のようなことばがある。「自古帝王臨御天下中国居内以制夷狄夷狄居外以奉中国未聞以夷狄居中国治天下者也……此豈人力實乃天授彼時……古雲胡虜無百年之運験之今日……」。「夷狄」が天下を取ったのは天の意志によるもので、それも百年の運がないと主張し、自らの天命による正統性を強調している。

たから、その後継者も実はモンゴルの子だ、と因果報応の説を広げた。本質的にはトゴン・テムール・ハーンを宋の末帝趙顕の子とする伝説とまったく同じである、との解釈である（周　1987：12-15）。

『南京太常寺志』は『蒙古源流』より少し早い時期に書かれている。「明代のモンゴル人」のあいだに中原のエピソードが何故これほど多かったかについても、周氏は論考している。明は元朝の宦官を愛用したり、モンゴル人の来降を受け入れたりした。永楽帝の部下にもモンゴル人が多かった。そのような人たちが後宮のことにも詳しく、故国への思いも強かったことから、さまざまな伝説を創り出したのであろう。彼らはさらにこのような伝説を漠北のモンゴル人たちにも伝えていた、と周氏は推察している（周　1987：17）。

実際の永楽帝は5回にわたってモンゴル親征を実行し、「伝国の玉璽」を入手しようとした。そのような人物をモンゴルのハーンの子孫とする見方には、モンゴルにも明にも中国の君主を争おうとした意図が隠されているのではないか、と指摘して周氏は論を終えている（周　1987：17）。

永楽帝を元のトゴン・テムール・ハーンの子とする説と、トゴン・テムール・ハーンを宋の末帝趙顕の子とする2つの伝説は、およそ500年にわたってさまざまな歴史家と歴史研究家の関心の的となり、正史のみならず野史や筆記類にも数多くの記述がみられるという。数度にわたる真偽についての論争があり、もっとも最近では1930年代の傅斯年や呉晗など当時の史壇を代表する学者たちの論戦がある（周　1987:1-4)。周氏はどうやら、自らの論考によって、かような議論に終止符を打ちたかったらしい。

3．民間のテキスト

以上、中原において元朝から明朝に変わった歴史的変動に関し、直接的にせよ、間接的にせよ、この種の王朝交替を歴史研究者がどのように論述しているかを検討してきた。歴史研究者たちはモンゴルの年代記や漢籍を基本的な資料としている。モンゴルにはまた無数の民間伝承があり、それらを書きとめた写本もたくさんある。本章では、私自身が収集した王朝交替観を示す写本を紹介する。

3．1　従来の収集と研究

王朝交替観を示す民間伝承は、「元太子と真太子との物語」(*Yuvan Tayisi Jing Tayisi-yin üliger*) として知られている。1905年から1925年までオルドス地域

で宣教活動をしながら、モンゴル研究に幅広く携わってきたモスタールト(Mostaert, A)師がこの民間伝承の存在を世界に伝えた。モスタールト師は自らが採録した「元太子・真太子の二人」(*Yuvan Tayise Jin Tayise qoyar*) の物語を1937年に刊行された *Textes Oraux Ordos* のなかに収めている(Mostaert 1937:133-136)。「〈元太子・真太子の二人〉は、永楽帝がトゴン・テムール帝の子であるとする伝説を書きとめたものも残っている(私の所有している一本は、〈大明永楽帝が北京都を造らせた譚の書〉と題されている)。中国で生まれたこの伝説は、モンゴル地方に浸透し、『アルタン・トプチ』の作者およびサガン・セチェンにも知られていた」、とモスタールト師は解説している (Mostaert 1937:XIII;モスタールト 1993:40)。

モスタールト師は実際に語ったものを書きとめたうえ、この伝承を中国起源のものとしている。それは、おそらくモスタールト師自身が引用している傅斯年の1932年の論文に依拠した見解であろう。また、モスタールト師が所有していたとする「大明永楽帝が北京都を造らせた譚の書」(*Dayiming yuwa lowa qaγan begejing qota-i bayiγuluγsan üliger-ün debter. yuwa(n) tayise. Jing tayise*) は、セールイス (Serruys) 師によって整理されたモスタールト・コレクションにもNo. 63の文書として登録されている (Serruys 1975:199)。ただし、モスタールト師が所有していたのはひとつではない。もうひとつ、同じコレクション内のNo. 64の文書も同じ伝承の写本である。No. 64のタイトルは、*Erte-ü dayiming yuwa lowa qaγan-u begejing qota-i bayiγuluγsan üliger-ün debter* となっている (Serruys 1975:199)。No. 63の文書の表紙には "FL. Claeys" とあり、Florent Claeys (1871-1951、中国名葛永勉) 神父が集めたことを示している (Serruys 1975:199)。Claeys神父はモスタールト師より早くオルドスに入り、熱心な文書収集活動を行った (Aubin 1999:40)。その収集品は後日モスタールト師に渡っている (Serruys 1975:191)。

実はセールイス師は、モスタールト師のコレクションを整理し、カタログを作成する以前の1972年に、上記No. 63とNo. 64の文書を転写し、英語訳を付した形で公開している (Serruys 1972:19-61)。主人公が永楽帝である以上、「明代モンゴル史」研究家であるセールイス師がこの種の写本に強い関心を抱くことも当然であろう。セールイス師は論文のなかで、両写本ともモスタールト師によってオルドス地域から収集され、かついずれも1907 (光緒三十三) 年に書写されたものである、と伝えている (Serruys 1972:20-26)。このように、モスタールト師をはじめとする宣教師たちがオルドスから集めた写本類は、多

くのモンゴル研究者の共有財産となり、世界のモンゴル研究に寄与してきたことが明らかである。

モスタールト師の *Textes Oraux Ordos* (1937) は、その後フランス後に訳された(Mostaert　1947)。またその一部は磯野富士子氏によって日本語に翻訳された。日本語で『オルドス口碑集』と題する著作にも「元太子・真太子の二人」が選ばれている(モスタールト　1993：32-41)。

モスタールト師の研究は、少しずつ着実にモンゴルへ還元されつつある。還元作業の先頭に立っているのが、オルドスのオトク前旗のソノム(Sonum、曹納木)氏である。ソノム氏は、モスタールト師が独自の方法でローマ字表記している *Textes Oraux Ordos* をモンゴル文字に還元し、そのなかの「アルシ・ボルジ・ハーンの物語」(*Arji Burji Qaγan*)を選んで本のタイトルにしている(Mostaert (Sonum) 1989)。

モスタールト師がオルドスを離れて数十年たつが、「元太子と真太子との物語」を語る人は現代のオルドスにはまだ大勢いる。1989年には、オルドスの著名な語り手(üligerči)、チョグルブ(Čoγrub、1912-1989)氏が語った物語が『オルドス文化遺産』(*Ordus-un Soyul-ün Öb*)の第4輯として刊行された。このなかにも「元太子の物語」(*Yuvan Tayise-yin üliger*)が収録されている[9]。このほか、オルドスのウーシン旗が発行している『伝統文化』(*Ulumjilaltu Soyul*)という雑誌の1991年1号にも「元太子と真太子との物語」が納められている。ウーシン旗に伝わる手写本を現代の正字法に直したものである(Dalai　1991：28-32)。今でもこの物語が人びとに愛され、伝承されていることは明らかである。

では、現在のオルドス・モンゴル社会で、この物語が如何なる形で伝わっているのかを見てみよう。

3．2　資料提供者

ここで、私に「遠太子と真太子の物語」の写本を提供した人物、ブヤンマントグ氏(Buyanmantuγu，1912-1986)を簡単に紹介しておきたい。

ブヤンマントグ氏はもともとオルドスのジャサク旗(鄂爾多斯右翼前末旗)の出身で、トゥクチンという父系親族集団(Tuγčin obuγ)の一員である。20世紀初頭、漢人移民の増加により、ジャサク旗での草原が狭くなったため、オルドス西部のウーシン旗に移住した(Yang　2000：10)。

9　チョグルブ老の語った物語はいち早くHeissigによって紹介されている(Heissig 2000)。

ブヤンマントグ一家はウーシン旗西部のハラ・モリン・チャイダム（Qar-a morin čayidam,「黒い馬のいる平野」との意）に住んでいた。1971年春と夏は大旱ばつだったため、わが家は家畜をともなってハラ・モリン・チャイダムへ移動したとき、ブヤンマントグ家を何回か訪れたことがあった（Yang 2000: 10)。その際、彼が子どもたちに昔話を語って聞かせていた風景をみたことがある。

ブヤンマントグは著名なホンジン（Qonjin）であった。ホンジンとは『十善福白史』にも登場し、元朝時代に皇帝の宮庭で儀礼をつかさどる役であったと理解されている（Liujinsuve 1981：129)。チンギス・ハーンを対象とする八白宮祭祀の祭祀者集団のなかにも、ホンジンの爵号をもつ人がいる。また、後世のオルドス地域では、結婚式の進行係もホンジンとよばれるようになった。ホンジンになる人は、歌と詩歌を即興的に創作する才能をもたなければならない。ブヤンマントグ氏は当然有名なホンジンとして人びとに尊敬されていた。共産党政権になってから、1950年代に一時小学校の教師をつとめたこともある（Yang 2000：10)。

私は1997年2月に、ブヤンマントグ氏の息子、金鎖（ジンソール）（Jinsur、写真1）氏から手写本を借りて、ゼロックスコピーをとってから返却した。ホンジンとしてのブヤンマントグ氏はさまざまな祝詞を覚えなければならなかった。彼は祝詞

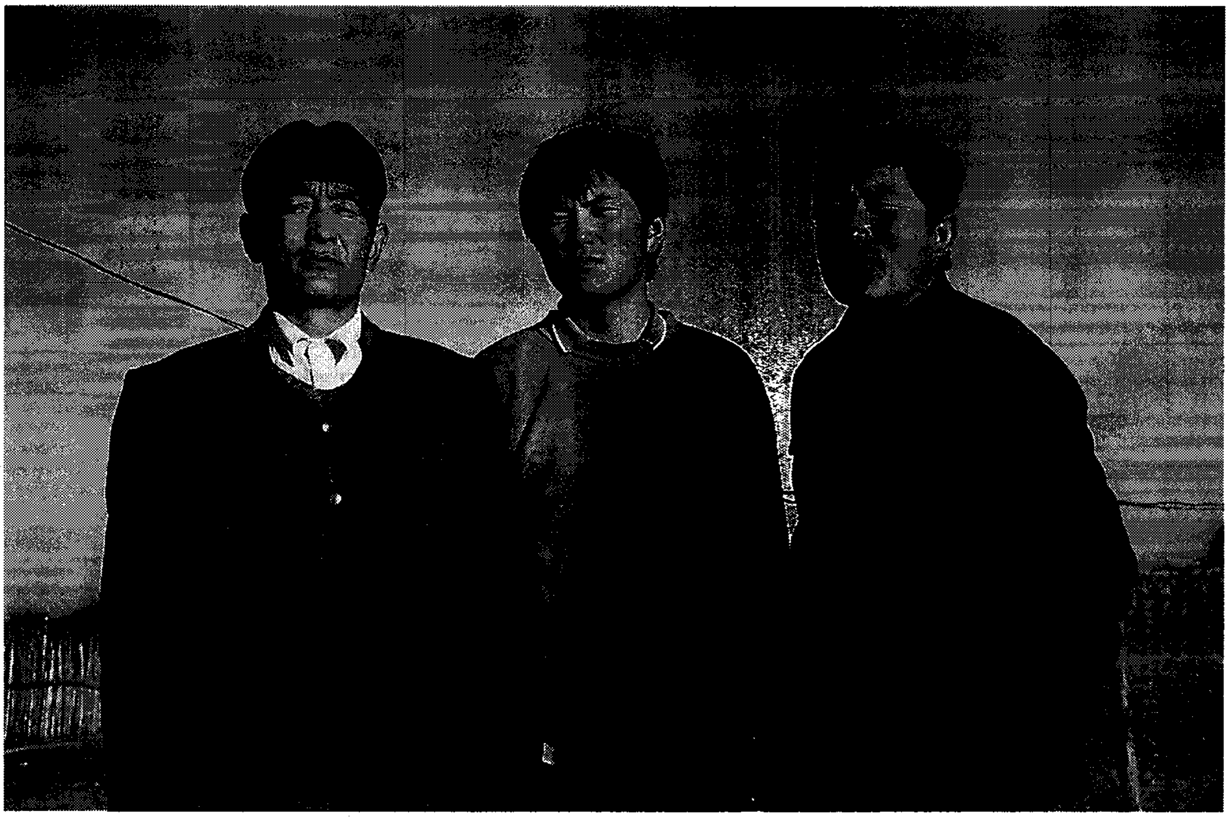


写真1　手写本の提供者金鎖氏（右）

類や物語を後世に伝えるために書きのこした、と子息の金鎖氏は私に説明していた（Yang　2000：10)。私はブヤンマントグ氏が書きのこした祝詞類をテキストとして公開した（Yang　2000：23-164)。

以下ではブヤンマントグ氏から入手した手写本の日本語訳を提示するが、手写本のローマ字転写テキストを付録一、オリジナル写本を付録二として文末に添付する。

３．３　テキスト：

いにしえの歴代ハーンたちの名前は以下のとおりである。トゴン・テムール・ハーンが大都城に在位していたころからはじまり、その次に朱洪武という漢人がハーン位に18年間座した。その次にはトゴン・テムール・ハーンの息子である遠太子が皇位を継承し、満洲とモンゴルがハーン位を占めてきた歴史がある。その順位は次のようになっている。

順治皇帝	在位60年間
康熙皇帝	在位61年間
道光皇帝	在位40年間
雍正皇帝	在位48年間
嘉慶皇帝	在位35年間
咸豊皇帝	在位30年間
乾隆皇帝	在位38年間
同治皇帝	在位28年間
光緒皇帝	在位30年間
宣統皇帝	在位3年間

以上は、満洲とモンゴルのハーンが12人、漢人[10]のハーン1人の計13人が在位した歴史である。この歴史を詳しく知っておくべきである。

昔、トゴン・テムール・ハーンのときに、モンゴル人長官（ダルガ）[11]1人につき10戸の漢人を管理していた。漢人たちは御馳走を食べる際、まずモンゴル人ダルガに最初の一口を供物（デージ）[12]として献

10　漢人を意味する言葉として、ブヤンマントグ氏のテキストではkitadを使っている。モスタールト師のテキストではirgen kümünとなっている（Mostaert 1937:133)。irgen kümünはもともと「属民」との意味であるが、後世では専ら漢族を指すようになった。なお、モスタールト師は独特な方法でモンゴル語のオルドス方言を表記しているが、本論文では便宜上モンゴル語文語表記を使用する。

11　モスタールト師のテキストではラマ（僧）となっている（Mostaert　1937:133)。

上しなければならなかった。娘を嫁に出すときは、まずその長官と一夜を共にしてからでないと長官は（結婚式に）出席しなかった。逆に嫁を迎え入れるときはまずその嫁をモンゴル人長官に捧げて味わってもらうようにしていた。

このように（漢人たちに）接していたため、大勢の恨みが一層ふくらんできた。漢人たちは5月5日にそろって（モンゴル人を）殺そうと相談しあっていた[13]。しかし、一部の人がその計画を知らなかったため、ついに実行できなかった。

その時代はまた漢人に男の子が生まれたら、その親指を切る[14]ことになっていた。ところが、ある家の男の子の親指を切っていなかったため、その子は私塾の学徒たちの頭子（ボス）になっていた。「八月十五殺韃子」つまり、8月15日にまたもや（モンゴル人を）殺すという計画を知って、私塾の子どもたちまでそのような條子（メモ）を山ほど書いたという。そう書かれた條子（メモ）は、風に飛ばされて津々浦々[15]にまで撒かれてしまった。計画通りにその日には漢人たちが自分たちの（モンゴル人）長官を殺して首を斬り、心臓をえぐりだして月を祭った。

漢人朱洪武が軍を結集してモンゴルの王朝を簒奪しようと準備していた。まもなく（彼は）大軍を派遣して大都城を包囲して戦った。3日間戦ったあとに城は陥落した。

城が敵の手に落ちたとき、トゴン・テムール・ハーンのトルバト・メルゲンという侍臣が、ハーンの第一夫人を連れてきて3人で逃げようとした。「祖先から聞いた話ですが、北の城壁の下から城外に出る穴があります。どうしようもないときはその穴から逃げなさい、との遺言を思い出しました」と賢い侍臣が進言した。3人はハーンの「和氏之璧」という玉璽をもって逃げ出した。穴の出口付近でしばらく休んだところ、玉璽を置いていた石の上には印璽の形が残ったという[16]。

漢軍が追っていると、玉璽の跡が残った石を見つけて、（トゴン・テムール・ハーンが）逃亡したのを知った。さらに後を追っていると、トーリ河に到着したトゴン・テムール・ハーンら3人は天から降ってきた黄金の橋をつたって無事に渡っていったことが見えた。ハーンは河の対岸にバラス城を建てて安全に暮らした。

ところが、トゴン・テムール・ハーンの第二夫人は第一夫人とのあいだで連絡がとれなかっ

---

12 degeji：デージ（degeji）とは初物、エッセンス、供物などの意味をもつことばである。正月や結婚式などの時に、客人に出す最初の儀礼的なお茶にデージが使われる。この際のデージは揚げパンにチーズかナツメをのせたものである。客人はこれを食べずに、ほんの少しちぎって口に入れるパフォーマンスをする。これを「デージを味わう」（degeji-yi amsaqu）という。デージを味わってから本格的な食事が始まる。デージはモンゴルにおけるお茶の作法や各種儀礼の場において用いられる食物である。

13 周氏は元初の徐焯の『烬余録』内にある「（江南占領後の元軍は）編二十家為甲、以北人為甲主、衣服飲食惟所欲、童男少女惟所命。……金芸楼室人周氏、花燭之夕、甲主踞之、周以熨斗破其脳。……越三年、五月五日、聯合省郡同殲甲主」との文面から、元初にはすでに5月5日に北人の甲主を合同で殲滅する説があったと説明している（周 1987:15-16）。

14 親指を切るのは、弓を引けないようにするためである。尚、モスタールトのテキストを磯野は、「漢人に男の子が生まれたならば、右手の親指を切りとってしまうのだった。それはどうしてそうしたかというと、弓を引くことができないためだ」と訳している（モスタールト 1993:32）。

15 原文は siyan（郷）šiyen muji（県）bolγan となっている。

たため、逃げおくれた。第二夫人は大変美しい人で、彼女に惚れた朱洪武は自分の妃にした。臣下たちは次のように朱洪武を戒めた。「敵の夫人をめとることは決して良いことではない」という。しかし、朱洪武は何といっても彼女の美貌に引かれていて、彼女もまた朱洪武を尊敬していたので、結婚していなかった朱洪武は臣下たちの諫言を退けて夫婦となり、2人は仲睦まじく暮らした。

朱洪武と暮らすようになった第二夫人は、実は妊娠して2ヶ月ほどになる体だった。彼女はそれを隠し、天地に祈り、北斗七星に請い願った。祈りが実って、朱洪武に嫁いでから11ヶ月たってから分娩した。朱洪武と暮らす以前の2ヶ月間を加えると、あわせて13ヶ月[17]間もたってからひとりの男の子を生んだのである。

男の子が生まれた状況に鑑み、占い師に見てもらったところ、「たいそう運勢の良い人だ」といって、遠太子と名づけた。モンゴル語では「遠くからの太子」という意味である。

その後もうひとり男の子が生まれた。同じように占い師に見せたら、「運勢は兄に及ばない」といって、真太子という名をつけた。これはモンゴル語で「本当の太子」という意味をもつ。

真太子は運勢が兄の遠太子に及ばない。それに兄の遠太子は父親になついていたし、父の皇位を継ぎたいと思っていた。ところが、大臣たちは「遠太子という名づけ方からみて、きっとわれわれの皇帝の血脈ではないにちがいない」と朱洪武に進言したが、却下された。「人間はその母親の胎内に10ヶ月以上はいられるわけがない。彼女はわしのところにきてから11ヶ月もたつ。どうしてわしの子ではないといえるのだ」と朱洪武はいって聞かなかった。

このように言い争った後、遠太子と真太子の2人は仲が悪く、いつも喧嘩していた。2人をみて母親は心配して、遠太子のために2通の封書を用意して渡した。「1通は悲しむときに見なさい。もう1通は幸せなときに見なさい。これらを用心深く隠しなさい」、といって与えた。まもなく母親は病気[18]で苦しみ亡くなった。朱洪武は妃の死を悲しみ、2人の皇子も仲が悪いことから大変な辛酸をなめた。

このように悲しみにくれていたある日、朱洪武は突然昼時に眠ってしまったが、悪い夢をみてびっくりして目覚めた。夢のなかで、黒い縞模様の蛇と黄色い縞模様の蛇がからみあって玄関から入ってきた。黒い縞模様の蛇は右膝にすがり、黄色い縞模様の蛇は左膝に抱きついたことで驚いて目が覚めた。

朱洪武は占い師に夢のことを説明してもらおうとしたが、「いまに分かるよ」との返事だった。するとまもなく2人の皇子がつかみあいながら入ってきた。遠太子は右膝にすがり、真太

16 モスタールトのテキストは次のようになっている。「ジュー・フン・ウー（即朱洪武一楊）は追いつけずに引き返してゆく途中で、そのトゴーン・トモル帝(ハーン)が行き疲れて休む時に玉璽を地面においたその跡を見て、その玉璽の文字の一部分が出ていたのを写しとって、それを彫って玉璽を作りあげて、ダイトゥン都(ゴト)でジュー・フン・ウーは帝(ハーン)となり、位についたそうだ」（モスタールト 1993:33）。「伝国の玉璽」が明側に渡らなかった、という設定は、暗に明朝に正統性がないことを示唆しているのであろう。

17 13ヶ月という設定は、本論文の冒頭で示した『黄金史』の表現と同じである。

18 原文はnarin ebedčinとなっており、現代医学では食道癌と訳される。民間の見方では、食欲がなく、衰弱していく病気を指す。

子は左膝に抱きついて訴えた。朱洪武は大勢の臣下たちを召集して2人の訴えを審議させた[19]。臣下たちは次のようにいった。

「われわれの皇帝に2人の息子がいるが、まったく仲が悪い。長男の名前は『遠方からの太子』を意味することを考えれば、本当はうちの皇帝の骨肉ではないことを示唆しているのではないか。こうなれば、うちの皇帝の長男を何とかして消した方が良かろう。どういう方法で消そうか」という人がいた。

そうしたら、別のある大臣がいった。

「モンゴルが反乱した。南口門を通って攻めてくる。遠太子にそこを守れ、という厳しい命令を出して送りだそう。そして事前に黄河の渡し船を回収しておこう。もし河を渡れずに戻ってきたら命令に違反した罪で逮捕すればいい」といった[20]。また、「計画通りに派遣するときには、軍の精鋭を渡してはいけない。傷兵や鍛冶屋、木工、泥や瓦職人などを兵士にしたたて渡そう。古い武器や壊れた弓矢、やせほそった駑馬をやろう。すぐにまたもどってきても、精鋭軍団を与えてはいけない」といいあって、決定した。このことは皇帝の命令と偽称されて遠太子にいい渡された。

このようになったとき、遠太子も父皇の命令である以上、引きうけて出発するしかないと思った。遠太子は悲しむときがやってきたとみて、「悲しむときにみなさい」といわれた(母親からの)封書を開けてみたら、次のように書かれていた。

「遠太子よ、南口門を守りなさい、とお前が命じられたとき、決しておちこんではいけない。いざ出発するとき、必ず劉伯温[21]という大臣を侍者として連れて行きなさい。彼の教え通りに、また彼のことば通りにやりなさい。万一、食糧がなくなって困っても、お前の父親が用意しておいた食べ物はお前の頭上にあるから、それを射て食べなさい。黄河を渡るときも、ハーンの身分にふさわしく(威勢よく)命令を出し、絶対に退いてはいけない。後ろへ逃げてはならない」と強い口調で書かれた手紙だった。

遠太子は母親の残した封書を見て決心した。悲しむときがやってきたと悟り、渡された軍隊を素直に受けとった。出発前に(朱洪武に会って)いった。

「息子の私が父皇の命令をいただき、出発する前に父皇に謁見しにきた。息子は劉伯温を連

---

19 周氏は、2人の皇子の話は建文帝と永楽帝を指している、と解説している。同様な話は明代の『七修類稿』、『革除遺事』、『随志』、『建文遺跡』などにもあるという。例えば、『建文遺跡』内の「太祖一夕夢二龍闘殿中、黄勝而白負、明日見建文、成祖同戯、建文着白、心知後必不協」の記述はもっともモンゴル側の資料に近く、恐らくモンゴル側が明の資料を借用しただろうと見ている(周 1987:16)。

20 寺田の研究によると、洪武帝の死後、建文帝と燕王との対立が始まると、建文帝の側近たちは明の北辺にモンゴルの進攻があるのを待って、国境防衛を名目に燕王指揮下の精鋭を出撃せしめてから、北平の燕王を捕らえようという作戦計画があったという(寺田 1997:66-67)。

21 『明史』巻百二十八・列伝第十六の「劉基伝」には次のような記述がある。「劉基、字伯温、青田人。……基博通経史、於書無不窺、尤精象緯之学。……基佐定天下、料事如神。……」とある(『明史』1974:3777-3782)。また、中国の民間社会では劉伯温の非凡な能力を語る伝説も多い。1980年代に私が北京で暮らしていたころ、北京の故老から劉伯温が北京を建設した、という話を聞いたことがある。

れて行きたい。ぜひ許してください」と頼んだ。遠太子の願い通りに許可されたので、劉伯温を連れて出発した。

父皇朱洪武の命令を引きうけた遠太子は、黄河のほとりに4月29日にたどりついた。黄河の渡し舟は一艘残らず撤収されていた。黄河の岸に駐営して、5月1日にひとりの兵士を偵察に出した。「黄河の水が凍ったかどうか見てこい」と送りだしたが、戻ってきた兵士が「凍っていない」と答えると、「殺せ」との命令が下された。5日間に5人を行かせたが、みんな「凍っていない」と答えるのを、全員殺してしまった。6日目にまたひとりの男が派遣されたが、その男は「どうせ今日は死ぬんだ」と思い、「黄河の水がかちんかちんに凍っている」と帰ってきて報告した。

全軍が出発して河の岸に行ってみると、黄河の黄色い水は滔々と流れている[22]ではないか。そこで遠太子は聞いた。「黄河が凍ったといった者はどこにいる。どの辺りが凍っているのか」と聞くと、男は「この辺りです」と答えた。「それだったら、凍ったというところから、お前が先に入れ」と命じた。そうすると、命令通りに河は凍り、無事に（全軍が）河を渡ることができた[23]。

南口門へ向かう途中、食糧が底をついた。空を仰ぐと、太陽を覆いつくすほどの何万羽もの鳩が飛んでいるではないか。鳩を射おとして食べながら南口門に着いた。

南口門に着いたあとのある日、遠太子は弓矢を携え、馬に跨って狩りに出かけた。歩いていると、一尋ほどある背の高い黒馬に乗った、顔が紅銅色で、赤い槍を手にした人に出会った。その男は遠太子に「お前のその弓矢をわしによこしなさい」と命じた。男は矢を手にしてから四方に放していった。「お前、この4本の矢が達した場所を掘りおこしなさい。金銀が見つかるだろう。だから、お前はわしについて来なさい。お前はわしが槍で描いた通りに、361の街道と33の城楼がある、星宿の数と一致する28の衙門のある北京城という城を建てなさい。9つの龍を飾った玉座を設けて、お前はその上に座って永楽皇帝と名乗りなさい」といった。男は赤い槍を渡してまたいった。

「もしも、銀両が足りなくなったら、この槍を劉伯温に渡しなさい。いつ、どこでお金がなくなっても、この槍を突きたてたところに銀が見つかるだろう」といった。

その後、いわれた通りにその場所に行って駐営した。一緒に連れてきたさまざまな職人たちはみんな役に立った。その人の指示通りに城市を建てた。城市が完成したとき、大都城から朱洪武が死んだとの知らせが届いた。仕方なく200人の兵士を率いて遠太子が大都城に戻ろうと出発した。遠太子が来るのを聞いた弟の真太子は、以前に兄をいじめていたのを思い出して恐

22　原文はγoul ulaγan-iyar üilen urusju büi となっている。直訳すれば「赤い水が滔々と流れている」となろう。モンゴル人は春季の沙嵐のこともulaγan salkin 即ち「赤い暴風」と表現する。日本語に訳す時は赤を「黄色」にした。

23　黄河の水が凍っていないと答える兵士を殺し、凍ったと返事した兵士を先頭に渡河できたというモチーフは他にもある。かつて1696年に康熙皇帝が対オイラト作戦の途中にフフホトの西からオルドスに入って巻狩をしたことがある（岡田 1979:92-130）。この史実もオルドスで伝説化され、同様な挿話が民間に伝わっている。

くなり、首を吊って自殺した。これを知った遠太子は大いに悲しみ、父と母の墓前に叩頭し、弟の遺骸を埋葬して追悼した。大都城の役人を任命し、再び出発した。

新しく建設した北京城に帰ってきたら、いろんなところから報告が届いていた。漢人たちがモンゴル人を捕まえてきては、殺して頭や肝、それに心臓を取り出して月を祭っている。このような習慣がある、との報告であった。この報告を聞いた遠太子は激怒し、そのような月を祭る習慣を禁止した。その代わりに瓜や月餅で月を祭りなさい、との命令を出した。そのため、漢族の人たちは今日まで毎年8月15日には、西瓜に口や目を彫って人間の頭の形にし、それを割って月を祭るようになった。

そこで、遠太子は母親が残した、幸せなときに見なさいという封書を開けてみた。封書には次のようなことばがあった。

「お前が私のお腹のなかに2ヶ月ほどいたころ、朱洪武と結婚し、命が助かるようにこっそり天地に祈り、北斗七星に請い願っていた。その願いが叶ってお前は母親の胎内で13ヶ月もいて生まれてきたのだ。漢族の人たちもお前が彼らの皇帝の子かどうかで激しく争っていた。息子よ、お前は本当はトゴン・テムール・ハーンの骨肉で、朱洪武の子どもではない。いずれハーンになった暁には、モンゴル族には慈しみをもって接しなさい。仁愛と厳罰をほどよく使い、モンゴル側には仁愛でなければならない。仏あり、信仰ありの世界を創るように国を治めなさい。これは母からの遺言だ」と書かれていた。

遠太子は母の封書をしっかり読んで、いわれた通りの永楽皇帝になったのである。その後天竺の地からジャムスンとチョルジの活仏を招請しようとしたが、ジャムスンとチョルジは来なかった。(代わりに)ジャクジャ・イシの活仏が派遣されてきたため、わが国[24]は経典と仏をもつようになったのである。

これはトゴン・テムール・ハーンからはじまる、13人のハーンたちの歴史である。

終わり。

1979年。

1979年5月4日。

朗々とした旋律で語るこの話を、
大勢の友人たちに聞かせよう。
巧みな筆ときれいなことばで詩文にしたてた、
美しい物語をタラ(渡母)に伝えよう。

---

24 ここで古代の明を「わが国」と表現していることから、物語の語り手が現代中国の領土の一部とされている内モンゴル自治区の住民であることが現れている。

4．歴史と現在をつなぐテキスト

以上、ブヤンマントグ氏からのテキストを示したが、最後にこの「遠（元）太子と真太子の物語」が、現代のモンゴル社会でどのような意義をもち、どんな観念を抽出できるのかについて検討する。

4．1　伝説を語るとき—8月15日の現代的な意味

「遠（元）太子と真太子の物語」はモンゴル社会でもっとも広く知られている伝説のひとつである。内モンゴルのように、モンゴル族と漢族が混住しているような地域では、「遠（元）太子と真太子の物語」は毎年決まった時期に語られることによって、常に「現代性」をもつ物語として人びとに受けつがれてきたのである。

人びとは「遠（元）太子と真太子の物語」をどんな時に語るのか。私自身の経験から説明しよう。1972年の陰暦8月上旬、小学校に入る前の私は故郷ウーシン旗（Üüsin qosiγu）のある河谷で両親と一緒に草刈をしていた。そのとき、ハダチン部（Qadačin obuγ）のチャガンロンホ（Čaγanlongqu、故人）という老人からこの伝説を聞いたことは、はっきりと記憶に残っている。カトリック教徒[25]だったチャガンロンホ老は地元では民謡の伝承者、物語の語り手として知られていた。そのため、彼の語る「元（遠）太子と真太子の物語」は特別に印象が深かった。チャガンロンホ老は確か、8月15日が近づくとこの物語を語るのだ、と私に説明していた。

「八月十五殺韃子（パーユェシーウサーダーズ）」、つまり8月15日には韃子を殺そう、という漢人たちの通俗的な表現には、モンゴル人たちも敏感に反応していた。韃子とはモンゴルを侮辱する言葉である。1980年にオルドス地域東勝市の高校に進学した私は、在学中の3年間、毎年陰暦8月15日には漢人学生たちとモンゴル人学生たちが対立し、緊張関係にあったことを覚えている。この日には学校側から全学生に西瓜と月餅がふるまわれるが、漢人学生のなかには必ず「八月十五殺韃子」という言葉を口にする人がいたので、そのつどモンゴル人学生が学校側に抗議していた。学校当局だけでなく、政府も陰暦8月15日の「中秋節」には民族団結を強調しなければならなかった[26]。

25　オルドス・モンゴルのカトリック教徒の現状については、楊(1994:13-22)とYang(1999:205-223)を参照されたい。

26　檀上によると、元・明革命を民族革命とみなすか、あるいは階級闘争ととらえるかをめぐって、学界でも議論されたことがある。社会主義の中国においては、国内に少数民族を抱えている立場から、洪武帝を再び漢族の英雄とする可能性は低いだろう、との見解を示している(檀上　1997:306-307)。

その後も私は何回か老人たちが「遠（元）太子と真太子の物語」を生き生きと、まるで自分が見てきたような感じで語っていたのを見たことがある。いずれも8月15日前後のことである。何故、漢人が8月15日に月餅を食べて西瓜で月を祭るのか。「遠（元）太子と真太子の物語」はいわば、他民族の風俗習慣についてのモンゴル族側からの説明でもあった。

以上は私個人の経験であるが、漢族と隣り合って暮らしている現代中国内モンゴル自治区においては、決して個別的な事例ではない。モンゴル人は、漢人が「八月十五殺韃子」という言葉を口にしながら、西瓜と月餅を食べて陰暦8月15日を過ごしていることを、知っている。こういうときに、「遠（元）太子と真太子の物語」を老人たちが子どもたちに語って聞かせるのである。そのため、「遠（元）太子と真太子の物語」はつねに現代的な、現時的な口調で語らなければならなかった。1979年に書かれたブヤンマントグ氏の写本の中には、モスタールト師のテキストには見られない「民族」（ündüsüten）という言葉が多出しているのもその一例である。

漢人の「中秋節」に敏感になるのは、何も現在の社会主義時代だけの話ではない。1934年5月、天津の新聞『大公報』に『中秋の血』という小説の広告が掲載された。元朝末期の「八月十五殺韃子」を書いた歴史小説であった。この広告を目にしたモンゴルの知識人栄祥は、ただちに南京にある国民政府行政院院長の汪兆銘と蒙蔵委員会委員長の石青陽に抗議の電報を打つ。もし善処しなかった場合には、先年の『南華文芸』事件[27]以上の事件に発展する可能性がある、との文面であった。国民政府の命令により、問題の小説は発売禁止となる（栄祥　1999：214；忒莫勒　2001：320-321）。

韃子とは韃靼の口語形である。陝西省や山西省の漢人たちは現在でもときどき口にする言葉である。韃靼という言葉について、宮脇淳子氏は次のように分析している。「中国王朝の明は、モンゴル高原で遊牧生活を送っている人びとが、元朝と深い関係にあるモンゴル帝国の後裔であることを知りながら、かれらをモンゴル（蒙古）と呼ばずに、わざとタタル（韃靼）とよんだ。それは、中華

27　『南華文芸』事件については、張承志による記述がある。1932年、上海の北新書局から出された本に、回民の食タブーを、「豚をトーテムとする」形で解釈する内容があった。この本が上海の回民の不快を招き、北新書局が回民らに破壊された。その後、抗議活動は各地に広がるが、南京の『南華文芸』がイスラームと回民を下品な調子で侮辱する文章を掲載したことで、事件はさらに大きくなる。北京では回民5000人によるデモが発生し、西北の回民軍人や新疆のウイグル人まで動き出す。国民政府は侮辱文章の執筆者を逮捕するなどの措置をとり、事件を鎮静化させた（張　1993:126-129）。

思想の立場では、正統はただひとつしかなく、明朝だけがモンゴル帝国の宗主国元朝の継承者でなければならなかったからである」(宮脇　1995:6-7)。近現代における民族間関係のなかで、少なくともモンゴル族にとって、陰暦8月15日の「中秋節」は、ひとつの「鬼門」である、とモンゴル人たちは理解している。「中秋節」の起源は古かろう。ただし、後世においては元・明交替期の歴史が「中秋節」と重ねられて語られるようになった以上、「漢人対モンゴル」という構図が形成されたのであろう。「漢人対モンゴル」という構図は常に歴史的であると同時に現時的でもあった。あるいは、現時的な「歴史」であったかもしれない。「歴史を背負って現在を生きる」ときに、モンゴル側は「遠（元）太子と真太子の物語」を複習し、漢人の「中秋節」に対抗してきたのであろう。

4．2　「ミニ年代記」的な作品の意義

モスタールト師は「元太子・真太子の二人」について解説した際、物語はモンゴル人にとって都合のいい説であろう、と指摘している(モスタールト　1993:41)。中原の政権が漢人朱洪武によって簒奪されたが、朱洪武の次からは明朝も実質上はモンゴル人の子孫に統治されるようになった。物語からのメッセージは容易によみとれよう。

伝説や物語には即興性があり、語り手によってそのつど変容していく。語り手が置かれているそのときどきの政治的、社会的情勢も当然、語り手に何らかの影響を及ぼす可能性がある。それは伝説や物語の設定、語り方、ひいては語彙の使用等にも反映されることになろう。

本論文で紹介したボヤンマントグ氏のテキストは、冒頭と末尾の文章を除けば、物語そのものの内容はモスタールト師が採録したテキスト(Mostaert　1937:133-136)や、収集した写本(Serruys　1972:19-59)、それにチョグルブ老が語ったもの（*Ordus-un Soyul-un Öb* 1989：83-87）などとほぼ同じである。ボヤンマントグ氏のテキストの大きな特徴のひとつは、冒頭と末尾の文であろう。

ボヤンマントグ氏のテキストの冒頭と末尾の文章の執筆者が誰であるかについて、テキスト自身は何も記していない。ボヤンマントグ氏の創作かどうかも確認のしようがないし、創作者を割り出す意義もない。重要なのは、「トゴン・テムール・ハーンからはじまり、13人のハーンたちの歴史である」、という末尾のメッセージである。同様なメッセージは冒頭にも示されている。「いにしえの歴代ハーンたちの名前は以下のとおりである。トゴン・テムール・ハーンが大都城に在位していたころからはじまり、その次に朱洪武という漢人がハーン位

に18年間座した。その次にはトゴン・テムール・ハーンの息子である遠太子が皇位を継承し、満洲とモンゴルがハーン位を占めてきた歴史がある」、と強調している。ボヤンマントグ氏のテキスト内の独自の系統観を下表のように示すことができよう。

ボヤンマントグ氏のテキストが示すハーン位継承順位	実際の清朝歴代皇帝の年号
トゴン・テムール・ハーン	天明
朱洪武	天聡
遠太子（大明永楽皇帝）	崇徳
順治皇帝	順治
康熙皇帝	康熙
道光皇帝	雍正
雍正皇帝	乾隆
嘉慶皇帝	嘉慶
咸豊皇帝	道光
乾隆皇帝	咸豊
同治皇帝	同治
光緒皇帝	光緒
宣統皇帝	宣統

ボヤンマントグ氏のテキストにある清朝時代の歴代皇帝の継承順位とそれぞれの在位年数は、およそ史実とは合わないものである。史実と一致するかどうかよりも、テキストはわれわれにひとつの系統を呈示している。それは元朝から満洲清朝へつながる王朝交替である。元朝から明朝へつなごうという意識が極めて希薄である、という歴史観である。テキストが語っているのは明朝の起源についての話であろうが、それは元朝から清朝へと継続されていくなかでの、ひとつのエピソードにすぎない。物語のこのような設定は、1662年に書かれた『蒙古源流』の構成とも似ている。『蒙古源流』は、北元が滅んで清朝の歴史がはじまり、清朝の太宗皇帝が明朝を征服する部分で明朝の歴史について述べる形式をとっている。年代記もボヤンマングト氏のテキストも、元から清への「過渡期」において明の歴史を挿入している点で、共通しているといえよう。

モンゴルのトゴン・テムール・ハーンの息子である大明永楽皇帝(ハーン)の治世中の偉業は、天竺の地から高僧を呼び、仏教弘揚につとめたことである、とボヤンマントグ氏のテキストは設定している。これも、本論文の冒頭で示した『蒙古

源流』が伝える永楽帝の事跡と全く同じである。宇宙の誕生と宗教の起源に関する記述からはじまるモンゴルの年代記が、人間の営みとしての宗教弘揚で幕を閉じるという叙述は、当然の設定であろう。「遠太子と真太子の物語」を文字化した人物がどれほど年代記を参照にしたかは不明である。文字化の過程で年代記の叙述形式を踏襲したことで、口頭で伝承されていた物語が、王朝交替観を示すテキストへと昇華できたのである。「ミニ年代記」あるいは年代記のひな型として形成しつつあるテキストの意義はここにある。

テキストの物語は、年代記を抄録したとか、年代記の話を分かりやすく口頭伝承化した、との立場を私はとらない。物語と年代記との因果関係を探ったり、どこかに出典を求めることもあまり意味がないのではないか。むしろ物語も年代記も、何を語り、どのように叙述しているかに意義が認められよう。

参考文献

Aqamad Üligerči Čoγrub-un Yariγsan Üliger-üd(Ordus-un Soyul-un Öb 4). 1989.

Aubin, Fran oise.

1999 The Young Father Mostaer's Forerunners. In K. Sagaster(ed.) *Antoine Mostaert(1881-1971)-C. I. C. M. Missionary and Scholar,* pp.31-45. Leuven: Ferdinand Verbiest Foundation.

Dalai, B.

1991 Yuvan Tayiji-yin Qaγan Saγuγsan Čadiγ Kemekü Orusiba. *Ulamjilaltu Soyul*(1), 28-31.

檀上寛

1997「初期明帝国体制論」『岩波講座　世界歴史 11 ―中央ユーラシアの統合』pp.303-324, 東京：岩波書店。

Heissig, W.

2000 *Individuelles und Traditionelles Erzählen—Der Mongolische Erzähler Čoγrub(Čoyirub) aus Ordos (1912-1989).* Wiesbaden.

小林高四郎

1941『蒙古黄金史―蒙古民族の古典』　東京：生活社。

Liujinsuve

1981 *Arban Buyantu Nom-un Čaγan Teüke.* Kökeqota: Öbür Mongγul-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a.

Lubsangdanjin

1990 *Erten-ü Qad-un Ündüsülegsen Törü Yosun-u Jokiyal-i Tobčilan Quriyaγsan Altan Tobči Kemekü Orusibai.* Ulaanbaatar: Sinjilekü Uqaγan-u Akademi-yin Keblekü Üildbüri.

『明太祖実録』(巻二十六至四十三) 台湾：中央研究院歴史語言研究所校印本。

宮脇淳子

1995『最後の遊牧帝国ージューンガル部の興亡』 東京：講談社。

2002『モンゴルの歴史』 東京：刀水書房。

森川哲雄

1997「ポスト・モンゴル時代のモンゴルー清朝への架け橋ー」『岩波講座 世界歴史 11 ー中央ユーラシアの統合』pp.325-348, 東京：岩波書店。

モスタールト，A

1993（1966）『オルドス口碑集ーモンゴルの民間伝承』（磯野富士子訳） 東京：平凡社。

Mostaert, A.

1937 *Textes Oraux Ordos.* Monumenta Serica Monograph Series No.1, Peip'ing: Universitatis Catholicae Pekini.

1947 *Folklore Ordos(Traduction des Textes Oraux Ordos).* Peip'ing: The Catholic University.

1989（1982） *Arji Burji Qaγan*(Sonum baγulγan tayilburilaba). Begejing: Ündüsüten-ü Keblel-ün Qoriya.

岡田英弘

1979『康熙帝の手紙』 東京：中央公論社。

1993（1992）『世界史の誕生』 東京：筑摩書房。

2002『歴史とはなにか』 東京：文芸春秋。

Okada, Hidehiro

1967 An Analysis of the Lament of Toγon Temür. *Zentralasiatische Studien* 1, pp.55-78.

愛宕松男 寺田隆信

1998『モンゴルと大明帝国』 東京：講談社。

栄祥

1999「大青山人自序」『栄祥詩文選集』 pp.171-214, 呼和浩特：内蒙古教育出版社。

Sanag Sečen

1962 *Qad-un Ündüsün-ü Erdeni-yin Tobči.* Kökeqota: Öbür Mongγul-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a.

杉山正明

1992『大モンゴルの世界』　東京：角川書店。

1995『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道』　東京：朝日新聞社。

杉山正明　北川誠一

1997『大モンゴルの時代』　東京：中央公論社。

Serruys,H.

1972 A Manuscript Version of the Legend of the Mongol Ancestry of the Yung-Lo emperor. In J. G. Hangin and U. Onon(eds) *Analecta Mongolica*(The Mongolia Society Occasinal Papers, Number Eight), pp.19-61.

1975 A Catalogue of Mongol Manuscripts from Ordos. *Journal of the American Oriental Society* 95(2), pp.191-208.

寺田隆信

1997（1966）『永楽帝』　東京：中央公論社。

忒莫勒

2001「栄祥先生略伝」『民族古籍与蒙古文化』（呼和浩特市民族事務委員会編）1-2，pp.284-384。

烏蘭

2000『《蒙古源流》研究』　沈陽：遼寧民族出版社。

Yang Haiying

1999 Catholicism in the Ordos Today―Focusing on the Life Story of Rev. Joseph and His Family. In K. Sagaster(ed.) *Antoine Mostaert (1881-1971)-C. I. C. M. Missionary and Scholar,* pp.205-223. Leuven: Ferdinand Verbiest Foundation.

2000 *Manuscripts from Private Collections in Ordus, Mongolia(1).* Mongolian Culture Studies Ⅰ, International Society for the Study of the Culture and Economy of the Ordos Mongols(OMS e.V.), Köln, Germany.

楊海英

1994「変容するオルドス・モンゴルのカトリック―神父ジョセフ一族のライフ・ヒストリーを中心に」『西日本宗教学雑誌』16，pp.13-22。

張承志
1993『回教から見た中国ー民族・宗教・国家』　東京: 中央公論社。
張廷玉等撰
1974『明史』(第12冊)　北京: 中華書局。
周清澍
1987「明成祖生母弘吉剌氏説所反映的天命観」『内蒙古大学学報』3, pp.1-18。

付録　一　テキストの転写

一

1: Erte üy-e-yin qad-un üy-e boluγsan neres-i toγalabasu 2: Toγan Temür Qaγan Da Tung Qota-du bayiqu üyes-eče ekileged Toγan Temür Qaγan-u 3: daraγ-a bol Juu Qung Ü kegči kitad qaγan arban nayiman jil ejilen saγuγad daraγ-a-yi 4: Toγan Temür Qaγan-u üri Yuvan Tayisi kegči jalγamjilan Manjuu Mongγol qaγan saγuγsan 5: teüketei bayin-a. daraγ-a-yi jalγaγsan ni: 6: Ey-e-ber Jasaγči 60 jil. Engkeamuγulang 61 jil. Törü Gereltü 40 jil. 7: nayiraltu Töb 48 jil. Sayisiyal Irügeltü 35 jil. Tügemel Elbegtü 30jil. 8: Tngri Tedgügči 38 jil. Bürintü Jasaγči 28 jil. Badaraγultu Törü 30 jil. 9: Kebtü Yosu 3 jil. Manjuu Mongγol qaγan 12 nige kitad qaγan-tai neyite 10: arban γurban qaγan saγuγsan teüke büi. egüni narin medekü keregtei.

二

1: Erte urida Toγan Temür Qaγan-u üy-e-dü bol kitad arban erüke-yi Mongγol nigen daruγ-a jakiraju bayiqu-yin 2: ter-e üy-e-dü tere arban erüke nigen ayil-i sayin qoγula idebel degeji-yi amasaγulju bayiba. nigen okin-iyen 3: qorimlan mordaγulqu bol tere daγačang ni urid-iyar amalju qonuγsan-u tere darui degeji-yi 4: amsadaγ bayil-a. nigen beri baγulγaqu üyes urid-iyar degejilen amsadaγ bayiji ingkejü bayiγsaγar 5: olan-u qorusγal ulam ketüregseger tabuduγar sar-a-yin sin-e-yin tabun-du nigen edür-iyer alaqu-bar kelelčin 6: doγtabaču jarim ni medegsen ügei učir-ača ülü amjiba. getel nigen köbegün törübel 7: ereki quruγu abdaγ bayiji. nigen ayil-un köbegün törükül-e ereki quruγu-yi abuγsan ügei bayiγad 8: surγaγuli-yin olan suruγči nar-tu töüze bolju. nayimaduγar sar-a-yin arban tabun-du 9: alaqu kegsen suraγ-yi

sonusmayča ⟨ba yüvei še uu sa da za⟩ kegsen nigen üge-yi 10: sonusmayča keüked bolyan teyimü tioza büri bičiged obuyaljuqui. eyimü-eče sayiki bičigsen 11: tioza ni šiyan šiyen muji bolyan-du salkin qui-bar tarqaysan učirača mön tere edür-iyer 12: büri daruy-a nar-iyan alaju bayiyad toluyai elege jirüke-yi kerčilejü sar-a takiba 13: kitad-un Juu Qong Uu terigülen čerig čuylayulun Mongyol-un törü-yi buliyaqu-bar beledčü 14: olan čerig-yi tomilan Da Tung Γota-yi qomurun bayilduba. yurban edür bayilduyad yota-yi 15: buliyan abqu-du. Toyan Temür Qayan-u Tolbatu mergen tüsimel kegči Toyan Temür Qayan-u 16: abalai yatun-i yardan dayayulju qayan yatun yurbayuli qamtulan yabuqu-du mergen tüsimel 17: keleküni man-u degedüs keleküni qoyidu kerem-ün doyuyur qari tal-a-du yarqu nigen nüke büi. 18: ary-a muqurdabal tere nükü-ber dutayaqu keregtei kegsen nigen geriyes üge-yi boduysayar 19: qayan-u Qa Suu erdeni-yin tamay-a-yi egüregseger dutayan yaruyad nüke-yin aman deger nigen 20: qadan deger-e talbiju amaraysayar qadan-u deger-e tamayan-u orum yarjuqui.

三

1: tere olan čerig ner suraylan mördegseger sayiki tamayan-u orum-i üjiged dutayan yabuysan-i 2: medebe. mörden kögegseger Toyan Temür Qayan Tuyuli mörün kegči deger-e kürkü-dü tngri-eče 3: altan kögerge bayuyad yurbayula nigenčü gem ügei ketülen yaruyad čayadu jaq-a-du Baras 4: Qota-yi bayiyuluyad aysan jiryabai: ende Toyan Temür Qayan-u bay-a qatun-i 5: qoyar qatun qoyurdayan medege abču amjigsan ügei bayiy-a bay-a qatun ni qočaraju büi. 6: čegeged tere qatun bol sayiqan jisürkeg ekener bolqui tegün-i duralaysayar Juu Qung Ü tere qatun bey-e-yin- 7: degen yatun bolyaba. ingkekü-dü Juu Qung Ü-yin tüsimel bol Juu Qung Ü-yi ingkejü kelem-e. 8: dayisun-u nöküriyer nöküür bolyaqu bol teyimü sayin kereg bisi kejü kelel-e. eyimü-eče 9: Juu Qung Ü tere ekener-i üjikül-e sayiqan jisüleng tere ekener čü Juu Qung Ü-yi 10: yekede ürgün kündülejü bayiqul-a. nigente ekiner ügei kümün tegün-yi beyeren jöbsiyerjü 11: yekel-e sedkel siyudun qoniyarba. Juu Qung Ü luy-a qamturaqu üyes tegün-ü gedüsün-e qoyar 12: sar-a boluysan dobqur tai bayiju egün-iyen niyun daldalju. tngri yajar-tu sem-iyer Doluyan 13: Burqad-tu öčin dayadyaly-a kiju jablbiraysan-iyar Juu

*Qung Ü-du ečigsen-e qojim **arban 14: nigen** sar-a bolju törübei. urida bayiγsan qoyar sar-a-tai nigül sar-a **ürgüjü. arban** 15: γurban sar-a boluγad nigen köbegün törübei. tere **köbegün törügsen** bayidal laγsan-i 16: sinjigči-ber toγučiγulbasu jiyaγ-a **anu yekede sayin büi** ner-e-yi Yuvan Tayise kemen 17: neridbei. Mongγolčilabasu **qola-yin tayiji** kegsen üge bolai. daraγ-a-bar nigen basa köbegün 18: **törübei. tere köbegün-ü** jiyaγ-a sinjigči-ber üjigülbesü aq-a-dur kürkü ügüi **egün-ü ner-e ni** 19: Jing Tayise kemen neridtübei. Mongγolčilabasu čuqum tayiji **kemegsen** üge bolai. egün-ü jiyaγ-a anu 20: aq-a-daγan kürkü ügei. egün-ü aq-a **bol** ečige degen elbereltei büged ečige-yin törü-yi jalγamjilan-a*

四

1: egün-ü jabsar-tu tüsimel enü Yuvan Tayise kegsen-yi bodubal man-u qaγan-u uγsuγ-a bisi 2: kejü kelejü egün-yi Juu Qung Ü jöbsiyeregsen ügei Juu Qung Ü keleküni kümün kegči 3: eke-yin kebelen-eče bötükü-dü arban sar-a-ača degesi ilegüü bolqu yosu ügei 4: bayital-a ene ekiner nada iregsen-eče inaγsi arban nigen bolji yaγakiγad minei üre bisi 5: kini büi kejü yekede buliyalduba. ingkegsen-e daraγ-a Yuvan Tayise. Jing Tayise qoyaγula bol 6: nigečü eb ügei. kejiy-e egüride kereldün-e. eyimü ni eke qoyar köbegün-ü tölüge sanaγačilan 7: jobaju Yuvan Tayise daγan qoyar duγtui bičilel kijü ögbe. nige duγtui-yi jobaqu 8: čaγ-tu üjikeri. nige duγtui-yi jirγaqu čaγ daγan üjisügei. egün-yi narin nimba 9: kečiy-e kü keregtei kejü tusiyaγad daraγ-a-bar eke narin ebedčin degen erbegdegseger daraγ-a-bar 10: nasu nögčibei. Juu Qung Ü ekiner tegen sanaγ-a jobaγsaγar basači qoyar köbegün ču 11: qoγurun daγan eb ügei bayiqu-yi üjigseger egüri yeke jobalang-yi amsabai. 12: egüri nabta-du sanaγ-a jobaγsagar nigen üde-yin čaγ tokiyalduγsaγar genedte 13: umtačigiju nigen maγu jigüde jigüdelegseger čočin serebei. jigüden bol qara eriyen 14: moγai šaran eriyen moγai qoyar oriyalduγsaγar egüde-ber oruju iremegče 15: qara eriyen moγai baraγun ebüdüg oriyaba. sira eriyen moγai jigün ebüdüg 16: oriyaγad tegün-eče čočin serebei. kejü yekede ayuγun sočin serebei. 17: darui sinjigči-ber sinjigülbesü darui odu medegden-e ked γarumaγča darui 18: sayiki qoyar köbegün anu nočolčiγsaγar oruju ireged Yuvan Tayise baraγun ebüdüg-i 19: teberin Jing Tayise jegün ebüdüg teberin jaγaldulaγ-a kibe. el-e

kü učir ud-yi 20: olan tüsimed ner-i büridkejü egün učiri yarilčiγulbasu kelelčekü. man-u qoyar

五

1: qaγan-u qoyar köbegün bayiγad nigečü eb ügei bayidaγ. jiči yeke köbegün-i 2: qola-yn tayiji kemegsen ner-e-yi bodubal čoqum daγan man-u qaγan-u uγsuγ-a 3: bisi kegsen-i gerečilejü bayimu. eyimü-yin učirača abju üjibel man-u ene qaγan 4: köbegün-i ügeyisgebel jokin-a. yamar arγ-a-bar ügeyisgen-e kekül-e jarim anu kelekiini 5: Mongγol urbal-a Nang Kü Möng kekü γajariyar iren-e. Yuvan Tayise-yi tegün-i saki kemen 6: čingγada jakiy-a tusiyaju yabuγulqu daγan Šarai Γoul-un γarqu ongγuča bökül-i quriyaγad 7: γoul-iyar γarqu ügei bučan irebesü jarliγ-yi jörčiγsen yosuγar sidkebesü jokin-a 8: kejü kelelčen doγtuγad. nigente yabuγulqu-du jingkeni sayin čerig-i ögjü bolqu ügei 9: jigilen-eče sin-e čerig barilan tejing mujing nijing vajing eyimü olan darqačud-yi 10: čerig bolγan daγudan abju elengki jibseg balbarqai numu sumu turungqai moritu 11: eyimü čerig beledken yabuγuluγ-a udal ügei bučan irekü učirača. ünenkü čerig 12: ögjü bolqu ügei. ingkejü kelelčiγseger tabdarui qaγan-u jarliγ kemen Yuvan Tayise- 13: du tusiγaγad yabuγulqu-bar bolba. ingkekü-dü nigente Yuvan Tayise abu-yin 14: jarliγ kemen küliyen abju yabuqu boluγsan bolqur sayiki jobaqu čaγ irebei 15: kemen boduγad sayiki jobaqu čaγ-tu üjideg nigen duγtui bičigen negeken 16: üjibesü tere bičigün üge enü. Yuvan Tayise: čini bey-e nigente Nang Kü Möng-yi 17: sakiqu üyes-tü joriγ muquju bolqu ügei. γaγ mordaqu čaγ daγan Liü Bi Veng 18: kedeg tüsimed-iyen γaγakibaču γar tüsimed-ben γar tüsimel bolγan daγaγulju yabuqu 19: keregtei tere kümün-ü jiγan surγaγsan-i daγaju tegün-ü kelegsen yosuγar yabusuγai 20: idekü čaling künesü-ber muqurdabal čini ečige-yin oluγsan öb körüngge činü orui

六

1: deger čini daγaju yabuqu tegün-iyen qarbaju ideged yabusuγai. Šarai Γoul-i getülkü-dü 2: qaγan kümün yosuγar jarliγ baγulγan γarsuγai joriγ muquju oγtu bolqu ügei. 3: urban čuqaraju bolqu ügei kemen čingγada tusiγaγsan bičig bölüge. egüni nigeken 4: üjiged yekede joriγ siγud ba Yuvan Tayise

nigente jobaqu-yin čaγ ***boluγsan*** *5: bolqur enekü jobaqu čaγ-tur saγadal ügei čerig-iyen tusiyan* ***abču yabuqu*** *daγan 6: köbegün činü bi abu-yin jarliγ-i küliyen abču morduqu-***du abu*** *daγan baraγalan mörgüjü 7: köbegün nada daγan Lüü Bi Veng* ***tüsimed-iyen*** *daγaγulun örüsiyesügei kemen 8: γuyun mörgükü-dü* ***Yuvan Tayise-yin*** *γuyuγsan yosuγar öggügsen bolqur terikü 9: tüsimed-iyen daγaγ***ulun qamutulan*** *morduba. Yuvan Tayise nigente abu-yin jarliγ-yi 10: küliyen* ***abču yabuγad*** *Šarai Γoul-un jiq-a-du dörbedüger sar-a-yin qori yisün- 11: dü* ***kürkül-e Šarai*** *Γoul-un ongγuča nigečü ügei jayilaγuluγsan bolqul-a γoul-un* ***jaq-a-du*** *12: baγuγad tabuduγar sar-a-yin sin-e-yin nigen-dü nigen* ***kümün-i bayičaγalan*** *yabuγulba. 13: Γatun usu köldüjü üjikeri kemen yabuγuluγsan-***du köldügsen*** *ügei kemen 14: kelegsen bolqur ala kemen jakiγ-a baγuba.* ***tabun edür*** *tabun kümün-i jaruγad 15: büri köldügsen ügei kemen kelejü iregsen-i* ***čöm*** *alaba. jirγuduγar edür deger-e 16: nigen kümün yabuγuluγsan-du tere* ***kümün*** *boduγad bi ene edür-e yamarču 17: ükükü deger boluγsan bolqul-a. dusqayilan Γatun-u Γoul yekede köldejü büi 18: kemen kelejü irebei. čingkekü-dü čuγar mordun yabuγad γoul-un köbegün-dü 19: kürkül-e γoul ulaγan-iyar üilen urusju büi. tedeger Yuvan Tayise asaγurun 20: Γatun köldele kedeg kümün qamiγ-a-ban qaγurai köldegsen bayin-a kejü asaγubasu*

七

1: endeger bayin-a kemen kelekü-dü teyimü bol qamiγ-a köldegsen bayin-a kemekül-e ter-e kümün 2: egüber köldejü kekül-e türügülen oru kemen jarliγ baγuγsan-du yosuγarčilan köldeged 3: nigenčü gem ügei getülen γarba. tendeče yabuγsaγar sayiki Nang Kü Möng kemekü γajar 4: jaγur künesü payinča baraγdaqul-a degegsilen qarqul-a nara börkümen tümen taγtaγ-a 5: sibaγu nara börkümen tataγ-a daγan nisjü bayiju mordun yabuqu-ača ekilen tegün-iyen qarbun idegseger 6: tende kürjü irel-e: eyimü-dü nigen edür Yuvan Tayise numu sumu-ban egürčü mori-ban unuju 7: abalan ergečijü yabuqula. nigen delem ündür bey-e-tü qar-a mori unuγsan tas qar-a 8: mori tai čis ulaγan čarai tai. ulaγan jida bariγsan nigen kümün jolγuγad Yuvan Tayise či 9: tere numu sumu-ban nadur öge kemen jakiγad numu abču dörben jüg qarbal-a 10: tere kümün kleküni či ene dörben sumu dusuγsan γajar-i

aγudalan maltaju altan 11: mönggü nigeren oldun-a. eyimü-eče či namai dayan yabusuγai či mini jida-i mördüjü 12: jiruγsan jiruγasu-iyar daγaγulju γurban jaγun jiran nigen quduγ tai γučin γurban 13: tayisang tai aγsidar-un toγ-a-bar qorin naiman yamu tai eyimü Begejing Qota kemen 14: bayiγuluγad tegün-ü dumda čini bey-e qaγan ordun bayiγulun yisün luu oriyalduγsan 15: qas erdeni-yin sirege jasaju či tegün-ü deger-e Yüven Luven Qaγan kemen neredün saγuγsuγai 16: kemen jakiγad sayiki ulaγan jida-ban öggüged kelekuni kerbe mönggü dutabal ene jida-yi 17: Liü Bi Veng-dü öggüged kejiy-e mönggü dutabal qamiγ-a qadtaγubasu mönggü 18: oldamu kejü kelegsen-ü daraγ-a eyimü-yin učir mordun yabuju sayiki γajar daγan baγuju irečige bi 19: sayiki sin-e-ber barilan abuγsan olan jüil-ün darqačud büri keregtei kümün 20: bolba sayiki kümün-ü jiruγsan yosuγar qota yuuγan bayiγulun degürekü üyes

八

1: degürekü bolqu-du sayiki Da Tung qota-ača Juu Qung Ü qaγan bey-e önggerebei kemen 2: jakiy-a irekü-dü arγ-a ügei Yuvan Tayise qoyar jaγun čerig daγaγulun Da Tung 3: Γotan-a kürkü-yin urid Yuvan Tayise irebei kemen medege yabuγulqu-du sayiki Jing Tayise 4: degüü ni aq-a Yuvan Tayise-yi adalaju bayiγsan daγan yekel-e gemsijü bayiγsaγar čiquldaqu 5: daγan boγumilan üküjüküi. ayimu-du aq-a Yuvan Tayise-yi yekede sanaγ-a jobaju ečige 6: eke-yin-iyen šaril buvamba-yi dakin mörgüjü degüü-yin-iyen yasu-yi orusiγuluγad qoniγaran jobaju 7: Da Tung Qota-du noyan sungγaju talbiγad bučan yabul-a. ingkiged sayiki sin-e 8: Begejing Qota daγan kürjü irekül-e olan γajar ud-ača iregsen medegülel-dü kitad ud 9: Mongγol ud-yi qulγayilan abču ireged alaju toluγai elege jirüke-yi kerčijü 10: sar-a takidaγ eyimü jangsiltai boljai kemen medegülügsen edeger-i sonusuγad 11: Yuvan Tayise yekede kelinglen nigente takiju bayiγsan jangsil bayilγaqu arγ-a ügei eyimü-dü 12: γuva yuve bing boγursuγ-iyar takisuγai kejü doγtaγaγsan büi učir-ača edügetel-e 13: kitad ündüsüten naimaduγar sar-a arban tabun takilγ-a-yi ši γuva-yi toluγai aman nidütei 14: mayaγ tai nidü am-a γarγaju qaγalan takidaγ yosutai. čigegede Yuvan Tayise sayiki 15: eke-yin-iyen öggügsen jirγaqu čaγ-tu üji kegsen bičig-iyen γarγaju negeken üjibesü

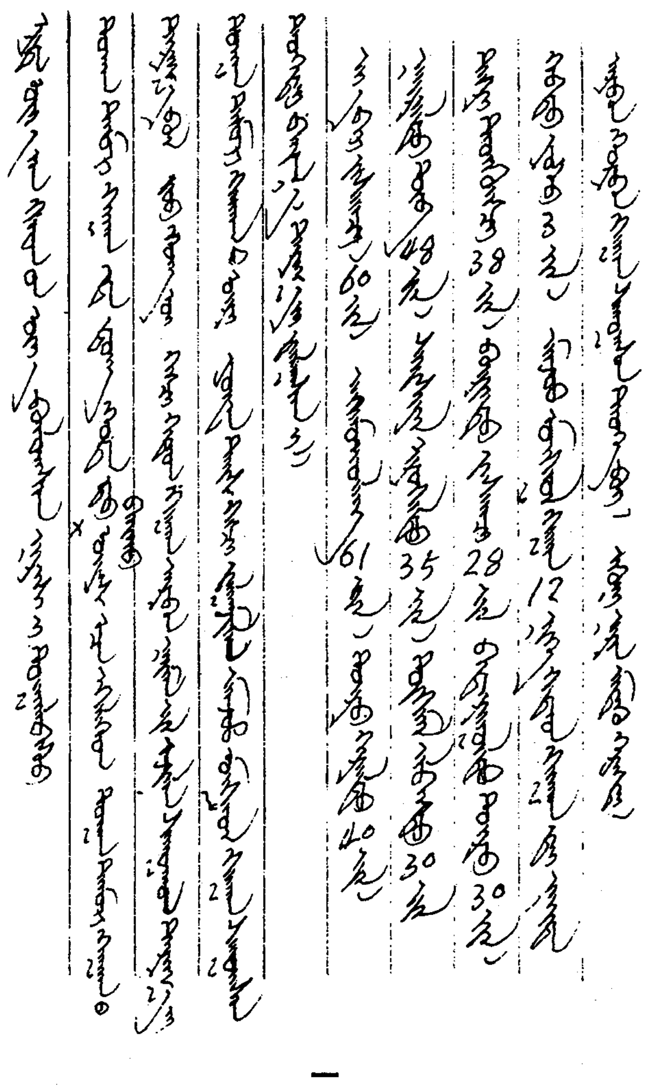
16: bičig-ün üge enü. čini bey-e ***mini gedüsün-dü*** *qoyar sar-a tai bayiqu üyes-tü 17: Juu Qung Ü luγ-a* ***uruγ bolju ami julban*** *γaruγsan tul-a. čamai-yi tngri- 18: dur daγadlaγ-a kiju* ***doluγan burqad-tu*** *sem-iyer daγadqaju bayiγsan ači-bar 19: či mini* ***gedüsün-dü arban*** *γurban sar-a bolju γaruγsan kitad ündüsüten 20: nar* ***man-u qaγan-u*** *uγsaγ-a kejü bisi kejü yekede buliyalduju bayiγsan yum-a.*

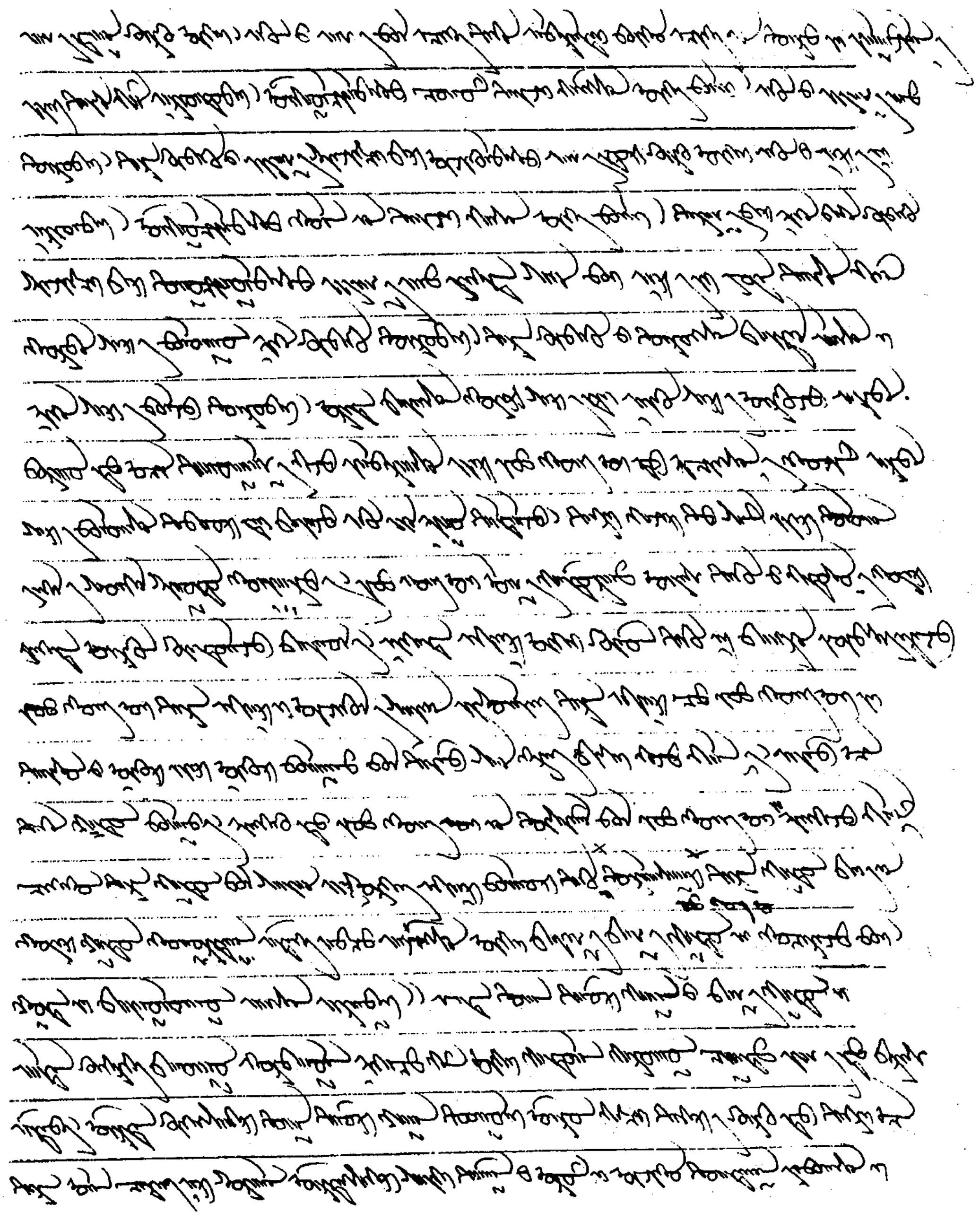
九

1: köbegün mini či bol čuqum ***daγan*** *Toγan Temür Qaγan ür-e mön Juu Qung Ü-yin 2: ür-e bisi yum-a ečüs tegen qaγan bolqu üyes Mongγol ündüsüten degen elgesig-iyer 3: bayiqu keregtei. qayir-a qala-yi tengčigülün Mongγol tal-a-ban ilegüü dotunu bayiqu keregtei 4: ene orun-yi burqan sasin tai bolγaju törü-ben sakiqu keregtei. eyimü-yin tula eke-yin 5: geriyes bičig kemen egüni naribčilan kinan üjiged tere yosuγar Yuvan Luvan 6: qaγan saγuγsan-u daraγ-a. Jakar-un orun ača Jamsan Čorji-yin gegen-i jalaγ-a. ilgebesü Jamsan Čorji gegen 7: iregsen. ügei Šaγja Isi-yin gegegen-i yabuγuluγsan-du man-u ulus-un orun ni 8: nom burqan tai boluγsan učir bayin-a. eyimü-dü Toγan Temür Qaγan-ača ekilen 9: arban γurban qaγan saγuju önggeregsen teüke bayin-a: 10: tegüsbei 11: nige mingγ-a yisün jaγun dalan yisün on 12: nige mingγ-a yisün jaγun dalan yisün on-u tabun sar-a-yin dörben 13: uyangγalaγsan üliger-i čini üjigseger bayiju. 14: olan yo nöküd tegen sonusγay-a da 15: uran-bir-un almas kele-ber üge bolγan bičigsen uran 16: sayiqan üliger-i oyun dara daγan singgeküni.*

附録　二　写本の影印

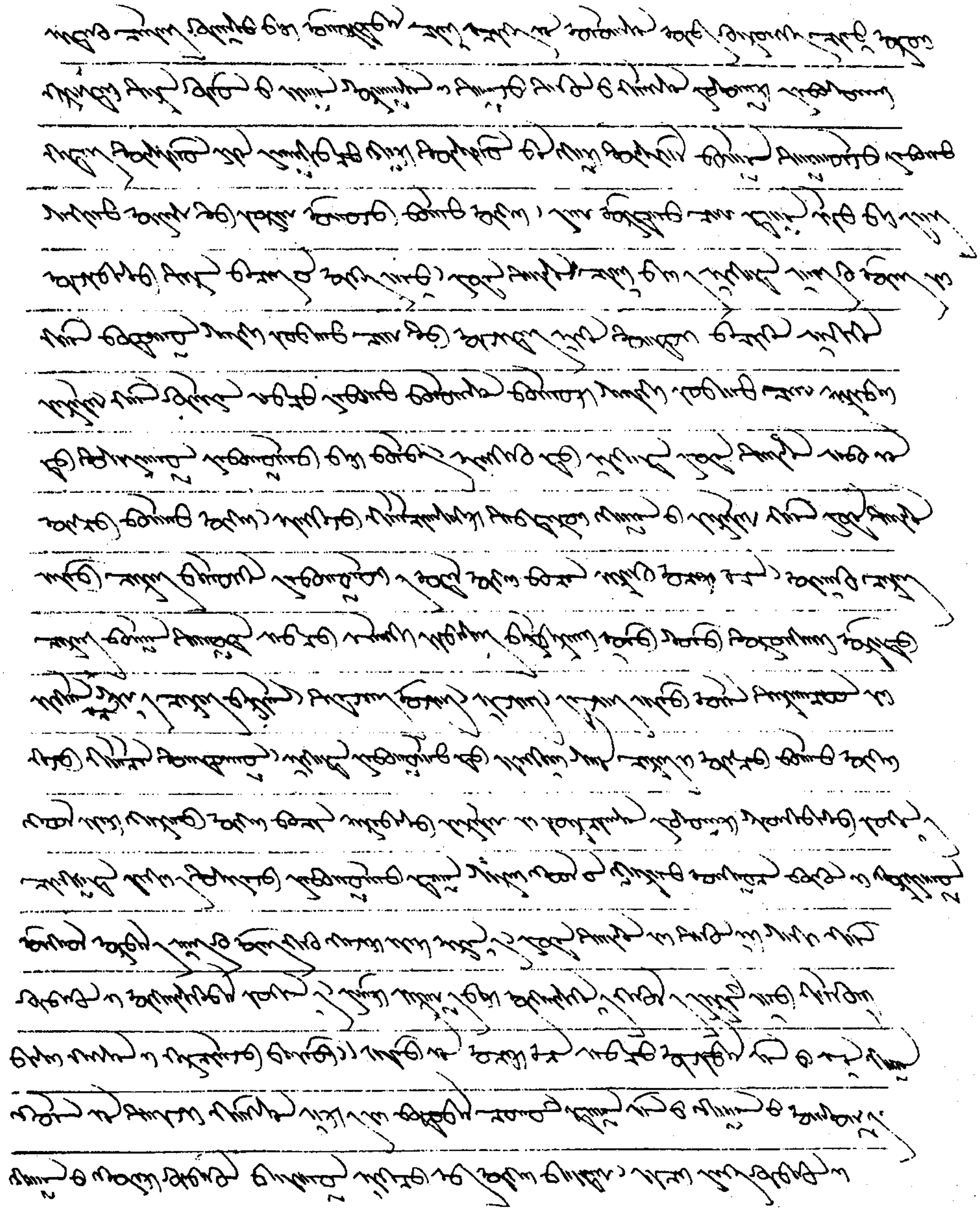
1　2　3　4　5　6　7　8　9　10





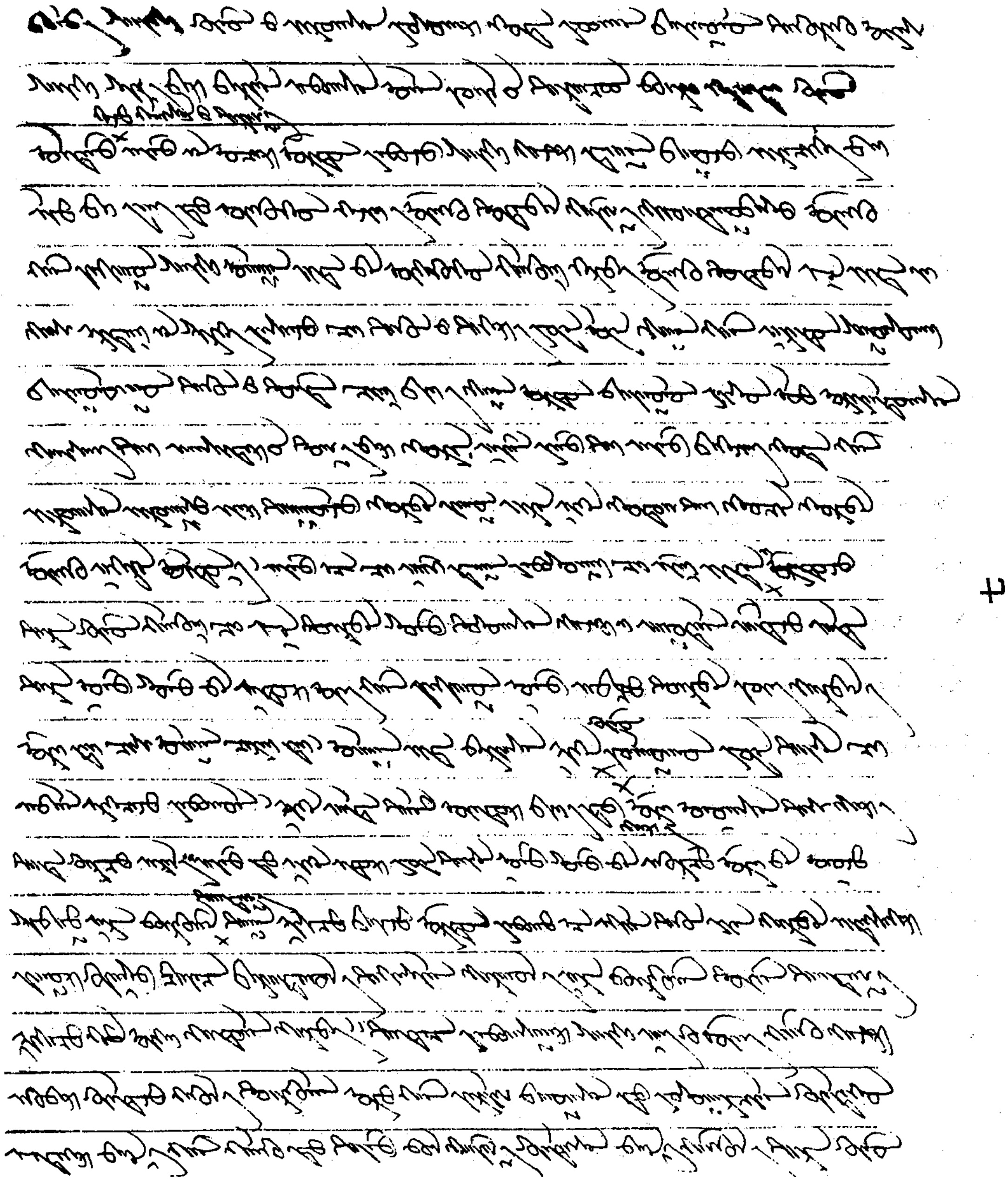
III

四



五

六



[illegible]

八

九